高江遺跡

福岡県筑後市大字高江所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 7 集

1991

筑後市教育委員会

高　江　遺　跡

1991

筑後市教育委員会

ST 50 出土 湖州鏡

序

高江遺跡の発掘調査は水資源開発公団筑後川下流用水事業の筑後川導水路埋設工事に伴って、平成元年度に導水路埋設予定地内に所在する埋蔵文化財の調査を行ったものです。

筑後市をはじめ筑後地方は石造物・埋蔵文化財等の文化財の宝庫ですが、その多くは未調査のままです。開発の波が押し寄せるいま、これらの文化財の調査そして保護は現代に生きる私たちの責務であり、早急なその対応が求められています。

今回、高江遺跡の発掘調査では弥生時代から中世そして近世にかけての、さまざまな先人たちの生活の跡を見る機会を得ました。この中で私たちは古代の世界に想いを馳せ、そしてこれから進むべき方向を見つける鍵を得ることでしょう。

この報告書は2ヵ月間にわたる発掘調査の記録であり、今後の文化財保護思想の普及の一助として、また学術研究の資料として、広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この報告書の発行にあたり、いろいろと御指導いただいた関係各位と発掘調査に参加された皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成3年3月20日

筑後市教育委員会
教育長　森　田　基　之

例　言

1．本書は水資源開発公団筑後川下流用水建設所が実施した平成元年度筑後川下流用水事業の事前調査として筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。調査関係者は第Ⅰ章に記した。尚、出土遺物は筑後市教育委員会が筑後市郷土資料館に於いて収蔵・保管している。

3．今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。また水準はT.P.を、方位はG.N.をそれぞれ基準とする。

4．遺構実測図及び遺構写真は永見秀徳、遺構の空中写真は（有）空中写真企画、遺構の全体図はアジア航測（株）、遺物実測図は永見，平塚あけみ，遺物写真は永見による。また製図は平塚が行った。

5．出土遺物のうち、湖州鏡の保存処理については九州歴史資料館技術主査の横田義章氏にお願いした。

6．本書の執筆は第Ⅰ章を小沢太郎、第Ⅲ章の遺物のうち土器の部分を平塚が担当し、その他については永見が担当した。尚、原稿の浄書にあたっては吉田博子の援助を得た。また、本書の編集は永見が行ったが、挿図・図版のレイアウトでは平塚の援助を得た。

7．表題文字は調査担当の永見による。

本 文 目 次

		頁
序 章	調査の経過	1
第Ⅰ章	位置と環境	4
第Ⅱ章	遺　　構	8
第Ⅲ章	遺　　物	20
第Ⅳ章	小　　結	29
終 章	結　　語	34

挿　図　目　次

頁

第１図　高江遺跡周辺の地形と主要遺跡 …… 5
第２図　ＳＩ 40 実測図 …… 9
第３図　ＳＩ 45 実測図 …… 9
第４図　ＳＢ 01 実測図 …… 11
第５図　ＳＢ 10 実測図 …… 12
第６図　ＳＢ 20 ・ＳＢ 36 実測図 …… 13
第７図　ＳＸ 60 実測図 …… 15
第８図　ＳＴ 50 実測図 …… 16
第９図　ＳＴ 18 ・ＳＴ 21 ・ＳＴ 22 ・ＳＴ 32 実測図 …… 17
第10図　ＳＫ 16 実測図 …… 18
第11図　ＳＩ 40 出土遺物実測図 …… 21
第12図　ＳＩ 40 出土土製品実測図 …… 22
第13図　掘立柱建物出土遺物実測図 …… 22
第14図　井戸出土遺物実測図 …… 23
第15図　ＳＸ 60 出土遺物実測図 …… 24
第16図　ＳＴ 50 出土湖州鏡実測図 …… 25
第17図　墓壙出土遺物実測図 …… 26
第18図　ピット・土壙出土遺物実測図 …… 27
第19図　参考資料：高江村出土遺物（「筑後将士軍談」から転載） …… 31

図　版　目　次

図版１　調査区全景（北から）
　　調査区全景（南から）
図版２　Ａ区全景（空中写真）
　　Ｂ区全景（空中写真）
図版３　Ｃ区全景（空中写真）
　　ＳＩ 40 土器出土状態
図版４　ＳＩ 40（空中写真）
　　ＳＩ 40 竈部分
図版５　ＳＢ 01（空中写真）
　　ＳＢ 10（南西から）
図版６　ＳＢ 10・ＳＢ 20・ＳＫ 16（空中写真）
　　ＳＥ 02（空中写真）
図版７　ＳＥ 03（空中写真）
　　ＳＸ 60（空中写真）
図版８　ＳＴ 50 検出状態
　　ＳＴ 50 遺物出土状態
図版９　ＳＴ 50（空中写真）
　　ＳＴ 32 墓石出土状態
図版10　ＳＩ 40 出土遺物①
図版11　(1)　ＳＩ 40 出土遺物②
　　(2)　ＳＩ 40 出土土製品
　　(3)　ＳＩ 40 出土不明土製品
図版12　(1)　掘立柱建物出土遺物
　　(2)　井戸出土遺物①
図版13　(1)　井戸出土遺物②
　　(2)　ＳＸ 60 出土遺物
　　(3)　ＳＴ 50 出土湖州鏡
図版14　(1)　墓壙出土遺物
　　(2)　ピット・土壙出土遺物

序章　調査の経過

筑後川下流用水筑後導水路は筑後川から南筑後地区の農地に農業用水を供給する目的で、久留米市から筑後市、瀬高町を通り高田町まで水資源開発公団によって敷設される。今回の高江遺跡発掘調査は、この筑後川下流用水事業に伴い実施したものである。

平成元年５月、水資源開発公団筑後川下流用水建設所から筑後市教育委員会に平成元年度施工予定地内の文化財の取扱いについて事前協議があり、その結果、筑後市大字高江に所在する高江遺跡について導水管の埋設部分および工事用道路部分について発掘調査を実施することとなった。

同年８月に再度協議し、試掘調査の実施が困難であることが明らかになった。そのため、遺跡の存在することが確実視される区域について、用地交渉終了後に試掘調査は実施せずに本調査に着手することとした。調査の費用については文化庁と農林水産省との協定にしたがい、農家負担分については筑後市教育委員会が負担し、残りは水資源開発公団が負担することとなった。

同年12月、筑後市議会12月定例議会での補正予算案の議決を経て、平成２年１月13日付けで水資源開発公団が筑後市教育委員会に発掘調査を委託する旨、委託契約を締結した。その後、導水管埋設工事の工期との兼ね合いから、遺構実測については航空写真測量を用いることになり、３月定例議会で再度予算を補正した。

現地の発掘調査は、１月14日に重機により表土を除去することから始め、２月１日には表土の除去を完了した。その後、２月８日から作業員を投入して実際の調査を開始した。３月10日に気球による空中写真の撮影をし、３月13日にヘリコプターによる航空測量を実施して調査を完了した。

また、出土遺物の整理および報告書の作成については、発掘調査の終了が年度末に近いうえに筑後市教育委員会の体制が不十分であるため、協議の結果、平成２年度に実施することとなった。

尚、高江遺跡発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体	筑後市教育委員会	
総括	教育長	森　田　基　之
庶務	社会教育課長	江里口　　充
	社会教育係長	松　永　盛四郎
	同和教育主査	後　藤　秀　夫
	社会教育係	松　尾　恵美子

社会教育係	高井良　宣偲衣	
〃	光　延　久　幸	（文化財担当）
〃	永　松　三　夫	
〃	木　本　敏　昭	
体育係長	山　口　逸　郎	
体　育　係	江　口　昌　勝	
〃	田　中　純　彦	
調査担当者　文化財学芸員（嘱託）	永　見　秀　徳	

発掘調査参加者　小　沢　太　郎（奈良大学学生）

愛　川　一　枝	今　村　鈴　子	江　崎　千　鶴	大　石　新　一
加　藤　禮　子	北　島　トモエ	城　戸　シヅエ	下　川　幸　子
下　川　まき子	田　島　勝　記	田　島　小　春	壇　和　昭
壇　ちゑ子	堤　妙　子	成　清　安　作	野間口　靖　子
原　田　トシカ	松　岡　昭　子	吉　田　幾　代	吉　田　月　子
吉　田　喜美子	吉　田　裕	渡　辺　章　子	渡　辺　水　春

また、整理作業および発掘調査報告書作成の体制は次のとおりである。

調査主体	筑後市教育委員会		
総括	教　育　長	森　田　基　之	
庶務	社会教育課長	江里口　　充	
	社会教育係長	松　永　盛四郎	
	女性問題担当主査	徳　永　邦　子	
	同和教育主査	後　藤　秀　夫	
	社会教育係	高井良　宣偲衣	
	〃	下　川　玲　子	
	〃	永　松　三　夫	
	〃	木　本　敏　昭	
	〃	福　田　美　穂	
	〃（臨時職員）	松　尾　智　恵	（平成２年12月まで）
	〃（　〃　）	吉　田　博　子	（平成３年１月から）
	体育係長	山　口　逸　郎	（平成２年５月14日まで）
	〃	渡　辺　幹　雄	（平成２年５月15日から）

体　育　係　　江　口　昌　勝
〃　　田　中　　豊
調査担当者　社会教育係　永　見　秀　徳
整理作業参加者　平　塚　あけみ（整理補助員）
小　沢　太　郎（奈良大学学生）
江　崎　千　鶴　久　保　なつみ　野間口　靖　子

このほか発掘調査から報告書作成に至るまで、筑後市文化財専門委員　佐田　茂氏（東海大学教授）、福岡県教育庁南筑後教育事務所技術主査　佐々木隆彦氏、太宰府市教育委員会文化財係技師　狭川真一氏をはじめ、次の方々から貴重な御指導、御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

水野正好（奈良大学）、宮小路賀宏、横田義章（以上　九州歴史資料館）、川述昭人（甘木歴史資料館）、小西信二（太宰府天満宮文化研究所）、赤崎敏男（八女市教育委員会）、田中康信（瀬高町教育委員会）、久留米市教育委員会文化財保護課の諸氏、山本信夫、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮、緒方俊輔（以上　太宰府市教育委員会）、武田光正（遠賀町教育委員会）

第Ⅰ章　位置と環境

本報告の高江遺跡は福岡県筑後市大字高江に所在する。

筑後市は南筑平野のほぼ中央部を占め、山地から低湿地へと漸移する地域に位置している。

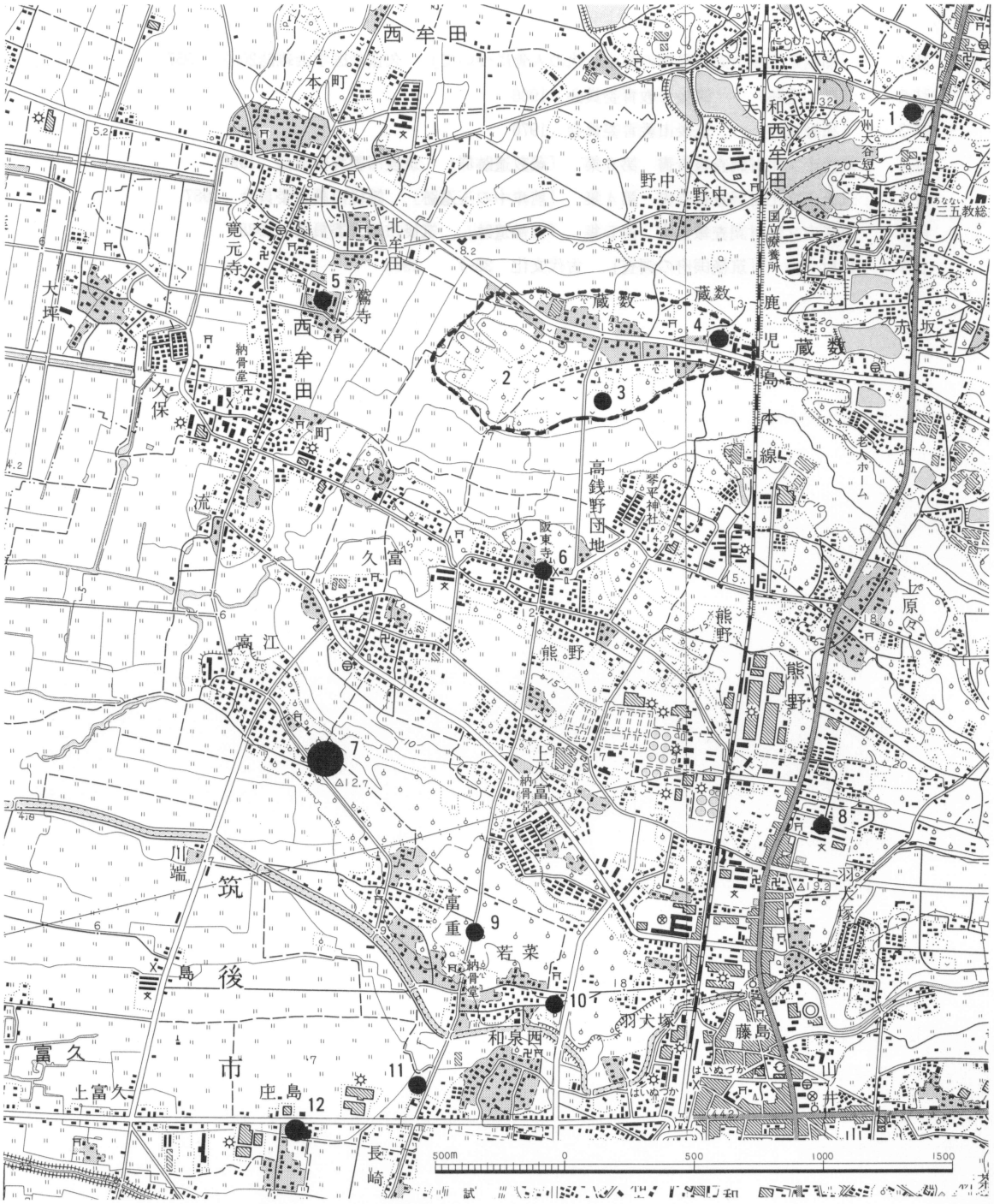
耳納山地から西にむけて派生した八女丘陵は北を広川、南を花宗川に挟まれ約10km延びている。この丘陵の南面に連続する形で中位段丘が八女市吉田付近から筑後市蔵数、同前津方面へと走る。さらに東方へ標高10～20mの低位段丘平担面が手のひらを広げたように分岐する。沖積面との比高は数mでその境は明確な形で漸移する。高江遺跡は西にクリークが縦横にめぐる沖積平野を望む低位段丘上に位置している。また高江からは以前弥生時代の箱式石棺が約300㎡の範囲から10基発見されたことがある。(註1) 石棺の全長は約1.7m、幅0.4mで内部を朱で彩色、うち一基からは身長1.6mの壮年男性の人骨が出土した。

次に周辺の主な遺跡を考古学的時代区分に基づいて概観する。まず縄文時代の集落跡、裏山遺跡がある。(註2) 高江遺跡の南東3.5kmの低位段丘上に位置、押型文土器等が採集されている。

弥生時代の遺跡としては常用遺跡がある。(註3) 高江遺跡の南3.7kmの低位段丘上に位置し、板付Ⅰ式～須玖式期の土器を出土した住居跡・墳墓群である。その他、蔵数遺跡群の一角が最近森ノ木遺跡として報告された。(註4) この調査では低位段丘上に営まれた弥生時代中期末～古墳時代に至る多数の住居跡が発見されている。しかも遺跡群の東部は蔵数東野屋敷遺跡として甕棺墓の存在が確認されており墓域に相当しよう。(註5) 終末期の集落としては裏山遺跡、森ノ木遺跡のほか狐塚遺跡も報告されている。(註3) いずれも低位段丘、低台地を単位として展開する集落である。

古墳時代も中期になると俄然活気を帯びてくる。付近一帯には数百基の古墳が存在しているが中でも筑紫君の墳基は傑出した規模を誇る一連の前方後円墳である。それは五世紀中頃の石人山古墳を初源として、岩戸山、善蔵塚、乗場、鶴見山古墳と、全体的に八女丘陵を東へ推移する。これらに比べて小規模な前方後円墳は点在の傾向をとり流れは不明確である。後者に属する筑後市域の前方後円墳に欠塚古墳がある。中位段丘上に位置し全長約41m、造り出しを有し五世紀末頃の築造とされる。そして集落跡としては森ノ木遺跡や高江の北2.3kmの低位段丘上に位置する田佛遺跡等が挙げられる。(註6)

奈良時代には中位段丘を横断するように推定西海道が走り、「延喜式」にみえる葛野駅を筑後市前津字車路付近に比定する説もある。(註7) 近世には薩摩街道の宿駅として羽犬塚が栄え、現在もその名残りとして国道209号線沿いに発達した町並みがみられる。



1. 瑞王寺古墳
2. 蔵数遺跡群
3. 森ノ木遺跡
4. 蔵数東野屋敷遺跡
5. 鷲寺遺跡
6. 熊野坂東寺
7. 高江遺跡
8. 羽犬塚遺跡
9. 辻遺跡
10. 若菜遺跡
11. 坊田遺跡
12. 石塚寺跡

第1図　高江遺跡周辺の地形と主要遺跡（1/25,000）

註1　「福岡県筑後市高江発掘の弥生時代の人骨について」　久留米医学会雑誌20-2　1957

註2　「裏山遺跡」　筑後市教育委員会　1966

註3　「狐塚遺跡」　筑後市教育委員会　1970

註4　筑後市文化財調査報告書　第6集　「蔵数遺跡群」　筑後市教育委員会　1990

註5　筑後市文化財調査報告書　第4集　「前津中の玉遺跡」　筑後市教育委員会　1987

註6　筑後市文化財調査報告書　第5集　「田佛遺跡」　筑後市教育委員会　1988

註7　松村一良　「筑後国府の調査」　古代文化　35-7　1983

第II章　遺　　構

当遺跡の調査にあたっては、現在活用されている道路が調査対象地を横切る形で２本走っているため、北からＡ・Ｂ・Ｃの３つの調査区にわけて発掘調査を行った。また表土の除去については全ての調査区で重機を使用した。

３つの調査区は、全て表土（黒色砂質土）を除去すると地山（暗茶褐色粘質土）が現れ、これが遺構面となる。ただし、Ｃ区の北端では一度２ｍ程削平をうけた後に埋め戻されているため、現地表面は北から南に傾斜するものの、遺構面はほぼ水平となっている。

以下、検出遺構をそれぞれ報告する。

住　居　跡

高江遺跡で住居跡はＡ区のみで検出されている。一応、２遺構を住居跡として報告するが、明確に居住跡といえるのはＳＩ 40のみで、ＳＩ 45については住居跡かどうか疑わしい部分もあるが、ここでは住居跡として取り扱うものとする。

ＳＩ 40（第２図、図版３・４）

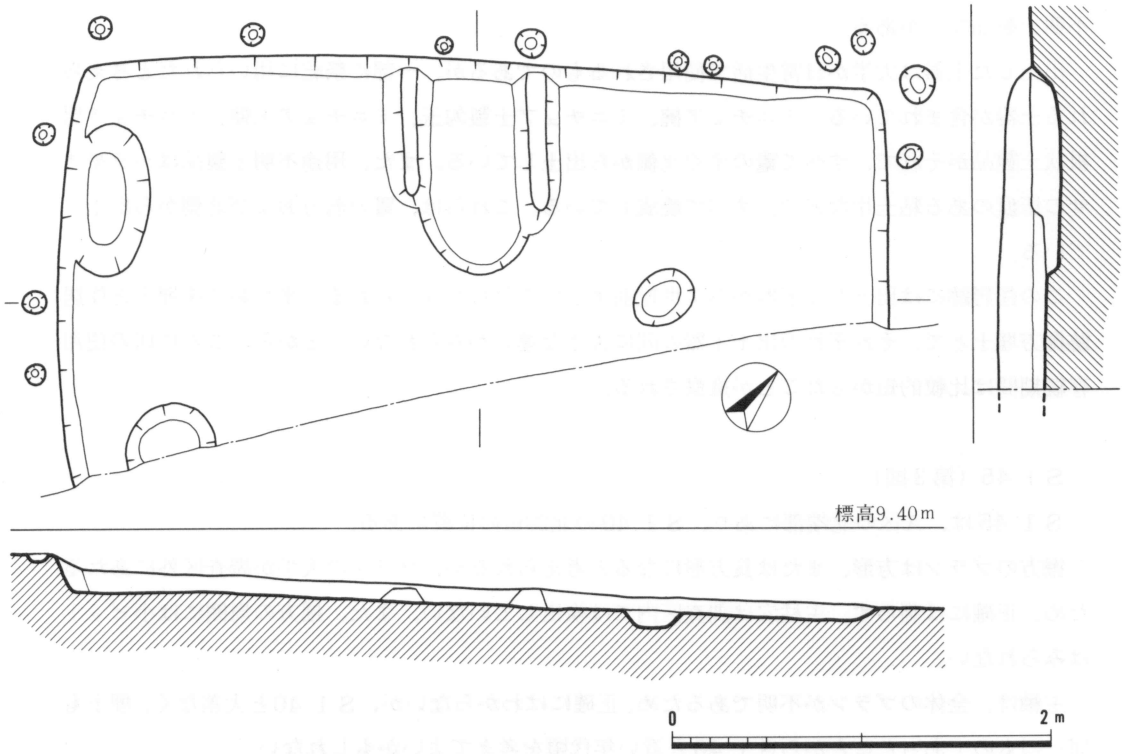
Ａ区のほぼ中央の東端に検出した住居跡で約３分の２が調査区外となる為、全体のプランは不明である。南北4.25ｍで西側の壁面中央部に竈を備える。全体の残存状態はあまり良いとはいえず、床面までの深さは20㎝である。埋土は表土よりやや暗く、暗黒色砂質土でピットの埋土も同一である。主軸はＮ－50°－Ｗである。

床面はいったん掘り下げた後、貼り床を施して調整している。貼り床を施す際には地山ブロックの混じった黒色砂質土を用いている。

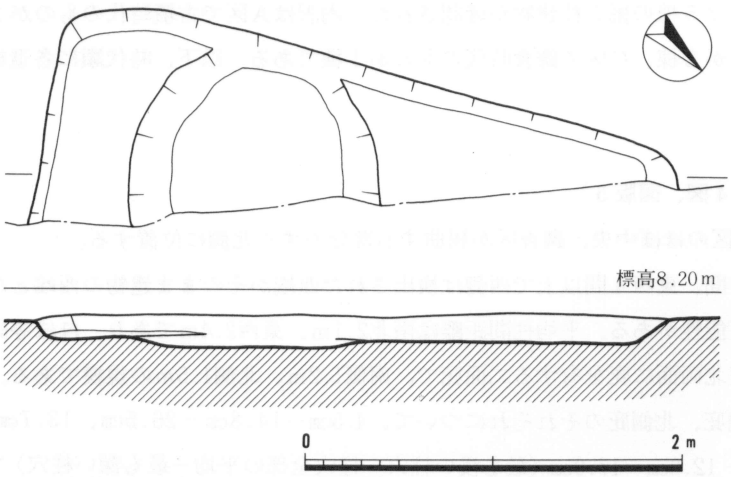
また、住居内に数個のピットを確認したが、主柱穴となり得るようなピットは、今回の調査区内では検出できなかった。主柱穴は調査区外に存在する可能性もあるが、主柱穴を有しないタイプである可能性も否定できない。

また、この住居跡の掘方のラインに添ってピット群が並んでいるのが確認された。このピット群は上部構造と関わりを持っていると考えて、ほぼ間違いなかろう。基本的には低い壁を構成する縦材の痕跡であろうと考えている。

竈は西の壁面のほぼ中央に焚口を東に向けて設けられている。主軸はＮ－45°－Ｗである。構造としては、２本の裾を黄茶色粘土でつくり、掘方のラインから竈の部分が張り出すことはない。裾の長さは北側、南側がそれぞれ72.5㎝、67.5㎝であった。また、煙道などの付帯設備は確認できなかった。



第2図　SI 40　実　測　図（1/40）



第3図　SI 45　実　測　図（1/40）

出土遺物は杯蓋、小型の壺、椀、甕、高杯、ミニチュア椀、ミニチュア土製勾玉、土弾、用途不明土製品などがある。

出土した土器は大半が日常生活で使用されるものであるが、一部に祭祀に用いられたと考えられる土器が含まれている。ミニチュア椀、ミニチュア土製勾玉、ミニチュア土弾、ミニチュア男根状土製品がそれで、すべて竈のすぐ北側から出土している。また、用途不明土製品はヘラやスサの圧痕のある粘土片などで、すべて焼成している。これらは、竈の前方および北側から出土している。

この住居跡には出土した土器から7世紀前半という年代が与えられる。また貼り床埋土と住居跡掘方埋土とで、それぞれの出土土器の間に大きな違いがみられないことから、この住居の使用存続期間は比較的短かったことが推察される。

ＳＩ 45（第3図）

ＳＩ 45は、Ａ区の北端部にあり、ＳＩ 40の北20mの位置にある。

掘方のプランは方形、または長方形になると考えられるが、プランの大半が調査区外にあたるため、正確には判らず、主柱穴は調査区内では検出していない。また、掘方の周囲には小ピットはみられない。

主軸は、全体のプランが不明であるため、正確にはわからないが、ＳＩ 40と大差なく、埋土も同一のものであったことからＳＩ 40と近い年代頃を考えてよいかもしれない。

掘立柱建物

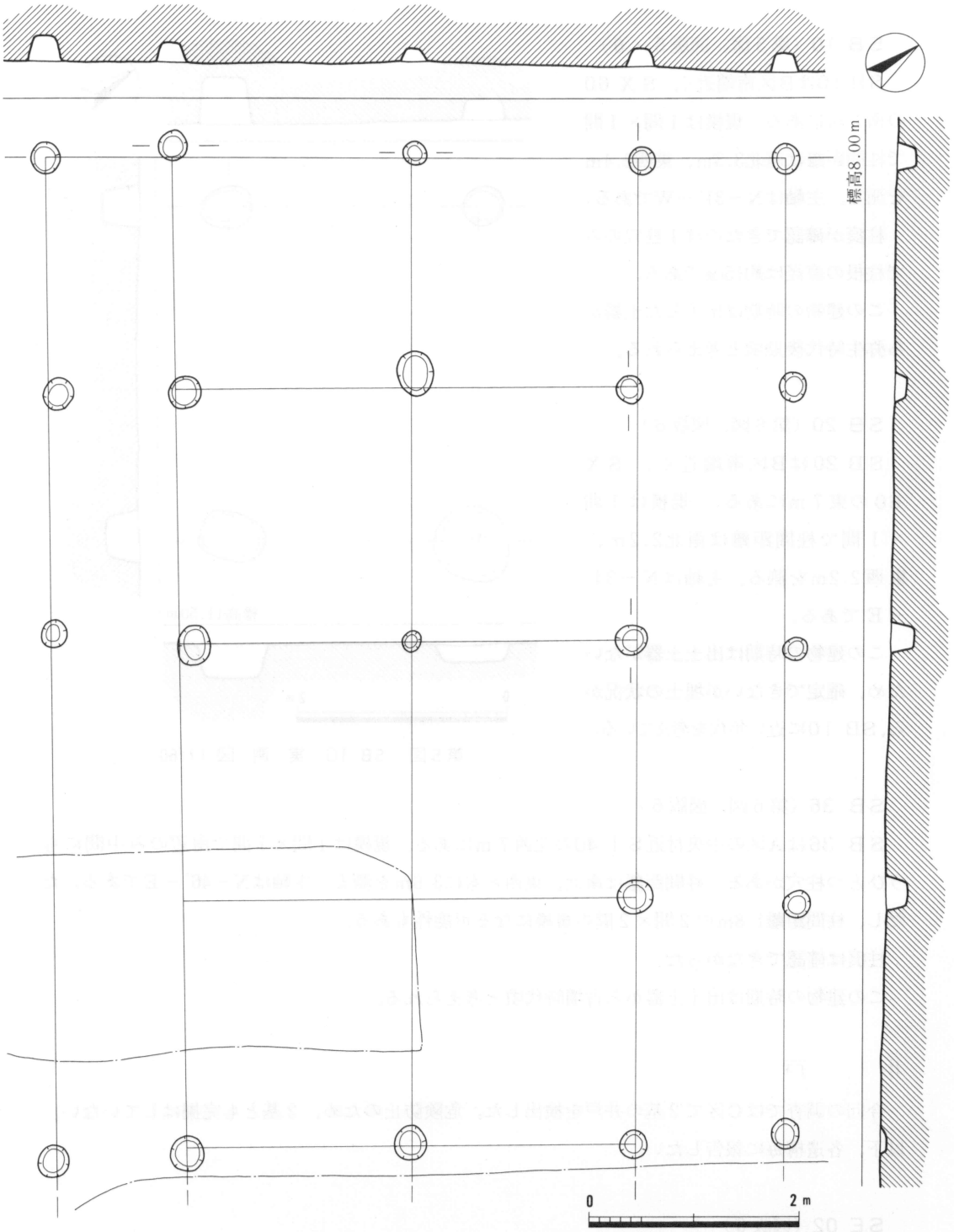
今回の調査では5棟の掘立柱建物が確認された。内訳はＡ区で古墳時代のものが2棟、Ｂ区で弥生時代のものが2棟、Ｃ区で鎌倉時代のものが1棟である。以下、時代順に各遺構毎に報告したい。

ＳＢ 01（第4図、図版5）

ＳＢ 01はＣ区のほぼ中央、調査区が屈曲する部分のすぐ北側に位置する。

規模は南北2間、東西4間以上で西側は検出された西端がそのまま建物の西端となる。東側はさらに伸びる可能性がある。平均柱間距離は南北2.1m、東西2.4mであり、ほぼ等間隔に並んでいる。また、南北両面に庇を有する二面庇で、南側1.2m、北側1.5mの規模である。柱穴の深さは本体部、南側庇、北側庇のそれぞれについて、4.5cm－14.8cm－26.5cm、13.7cm－18.0cm－24.7cm、7.0cm－12.0cm－17.0cm（最も浅い柱穴－柱穴全部の平均－最も深い柱穴）である。主軸はＮ－52°－Ｗである。

この建物の時期は出土した土器から13Ｃ頃と考えられる。



第4図　SB 01　実　測　図（1/60）

ＳＢ 10（第５図、図版５・６）

ＳＢ 10はＢ区南端近く、ＳＸ 60の南５ｍにある。規模は１間×１間で柱間距離は南北3.3ｍ、東西2.4ｍを測る。主軸はＮ－31°－Ｗである。

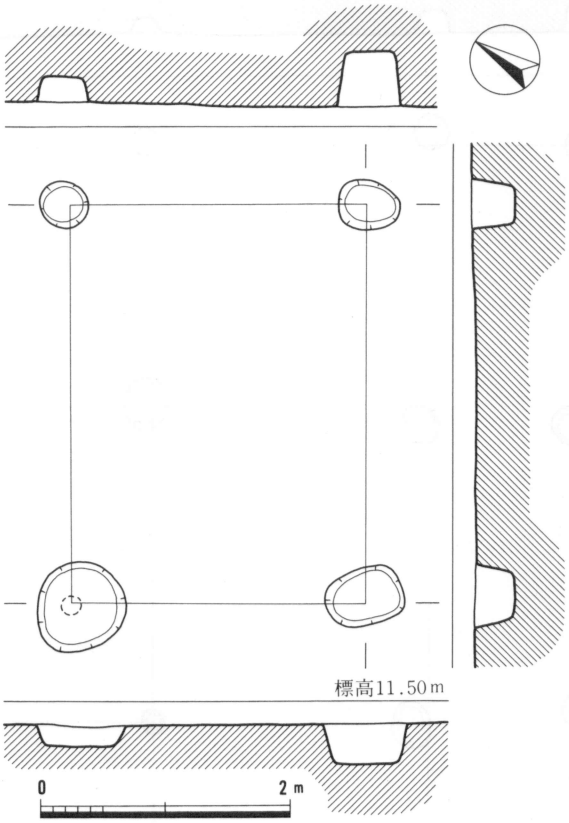
柱痕が確認できたのは１柱穴のみで柱根の直径は約15㎝である。

この建物の時期は出土した土器から弥生時代後期頃と考えられる。

ＳＢ 20（第６図、図版６）

ＳＢ 20はＢ区南端近く、ＳＸ 60の東７ｍにある。規模は１間×１間で柱間距離は南北2.2ｍ、東西2.2ｍを測る。主軸はＮ－34°－Ｅである。

この建物の時期は出土土器がないため、確定できないが埋土の状況から、ＳＢ 10に近い年代を考えている。



第５図　ＳＢ 10　実　測　図（1/60）

ＳＢ 36（第６図、図版６）

ＳＢ 36はＡ区の中央付近ＳＩ 40の北西７ｍにある。規模は１間×１間で南辺のみ中間にもうひとつ柱穴がある。柱間距離は南北、東西ともに3.6ｍを測る。主軸はＮ－46°－Ｅである。ただし、柱間距離1.8ｍの２間×２間の規模になる可能性もある。

柱痕は確認できなかった。

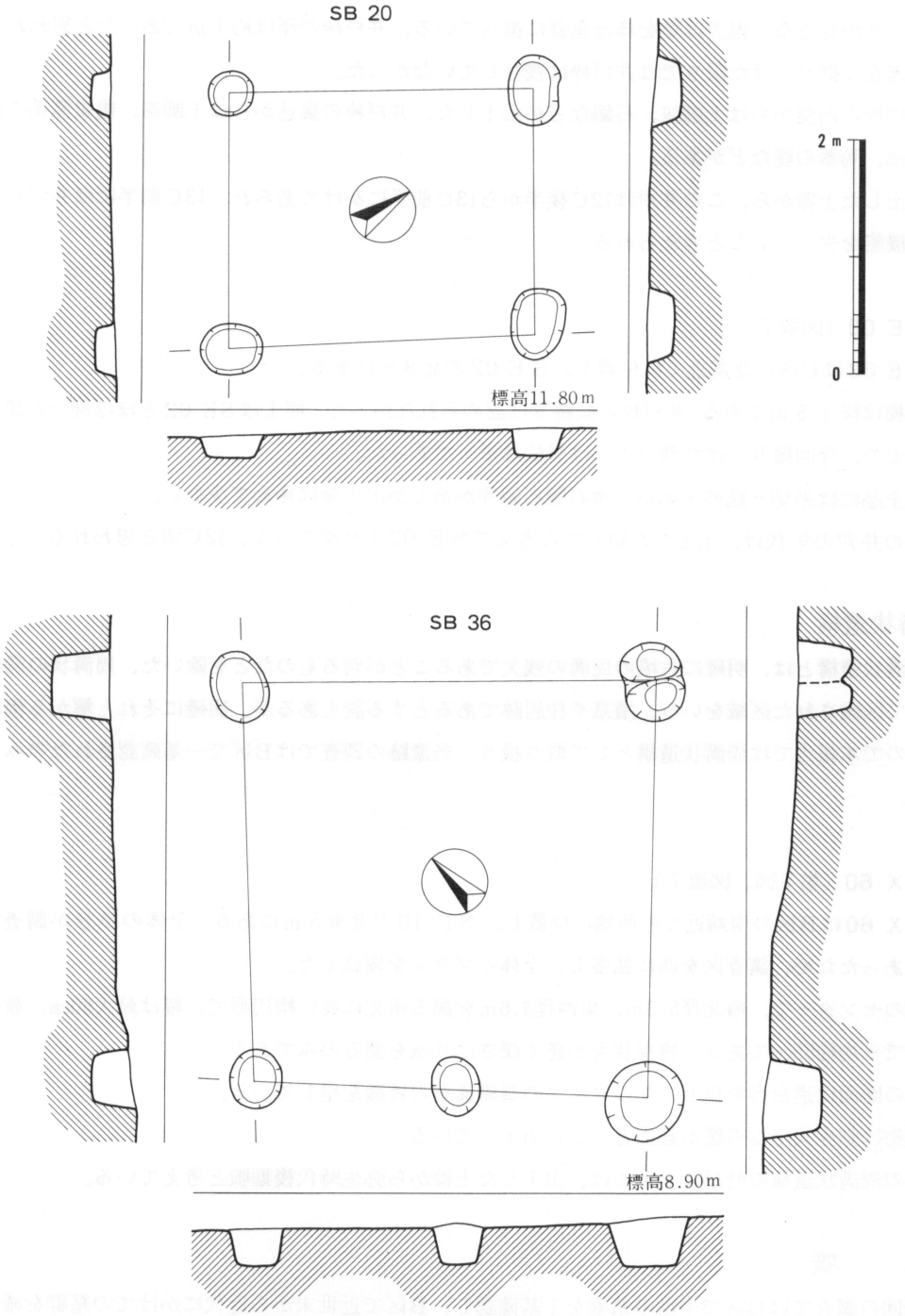
この建物の時期は出土土器から古墳時代頃と考えられる。

井　　戸

今回の調査ではＣ区で２基の井戸を検出した。危険防止のため、２基とも完掘はしていない。以下、各遺構毎に報告したい。

ＳＥ 02（図版６）

Ｃ区の北寄りに、調査区の西端に位置する。当初、西半分が調査区外であったが、調査区を拡



第6図　SB 20・SB 36実測図（1/60）

張し、全体のプランを確認した。掘方の径は1.5mで、埋土は黒色粘質土で裏込には赤茶色粘質土ブロックが混ざる。掘方は壁をほぼ垂直に掘っている。井戸枠の径は約１mであったと思われるが、調査で掘り下げた限りでは井戸枠は残存していなかった。

井戸枠の内側からは土師皿、石鍋などが出土した。井戸枠の裏込からは土師皿、龍泉窯系の碗の底部、陶器の甕などがある。

出土した土器から、この井戸は12C後半から13C前半にかけて造られ、13C前半には井戸としての機能を失っていたと考えられる。

ＳＥ 03（図版７）

ＳＥ 03はＣ区の北端近くに位置し、ＳＥ 02の北８mにある。

規模は径 1.5 mである。井戸枠の痕跡等は認められなかった。埋土はSE 02とほぼ同一の黒色粘質土で、今回掘り下げた部分までは層位は単一であった。

出土品には糸切り底の土師皿、滑石製石鍋等があるが出土量は極めて少ない。

この井戸の年代は、出土した遺物から考えてＳＥ 02よりやや古く、12C頃と思われる。

周溝状遺構

周溝状遺構とは、明確に古墳の周溝の残欠であることが判るものなどを除いた、周溝状の溝によって区画された区域をいう。墳墓や住居跡であるとする説もあるが、明確にそれと解かる例はないので本報告では周溝状遺構として取り扱う。当遺跡の調査ではＢ区で一基確認されたのみである。

ＳＸ 60（第７図、図版７）

ＳＸ 60はＢ区の南端近くの西端に位置し、ＳＢ 10の北東５mにある。全体の半分が調査区外であったため、調査区を西に拡張し、全体のプランを確認した。

溝のセンターで、南北径5.5m、東西径4.6mを測る南北に長い楕円形で、幅は最大60cm、最小40cmで平均約55cmである。残存状況が悪く深さは６cmを測るのみである。

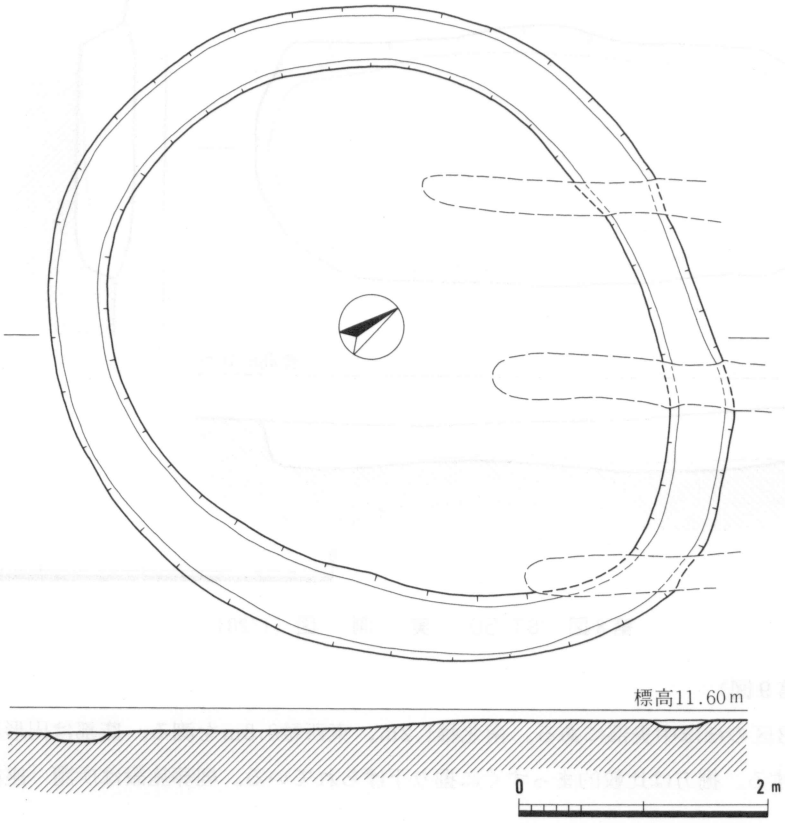
溝の断面は逆台形を呈し、このタイプの遺構通有の特徴を呈している。

遺物は弥生式土器の甕が底面近くから出土している。

この周溝状遺構の時期については、出土した土器から弥生時代後期頃と考えている。

墓　　壙

今回の調査ではＣ区で中世の墓壙を１基確認し、Ｂ区で近世末から近代にかけての墓群を確認した。以下、遺構毎に報告したい。



第7図　SX 60　実　測　図（1/60）

ＳＴ 50（第８図、図版８・９）

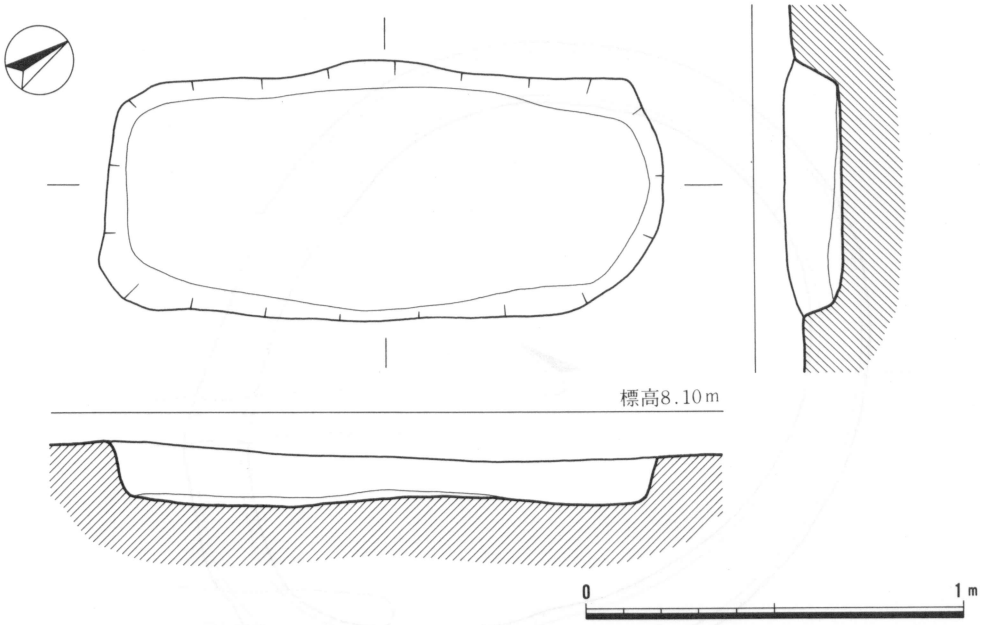
ＳＴ 50はＣ区の北部に位置し、ＳＥ 02から東へ９ｍ、ＳＢ 01から北へ10ｍのところにある。

プランは隅丸長方形で、南北１ｍ49㎝、東西68㎝を測る。後世の削平により、残存状態は悪く、深さは約15㎝を残すのみであった。主軸の方位はＮ－33°－Ｅである。

埋葬形態は出土状況から、木棺墓、木蓋土壙墓などを考えているが、木製の蔵骨器を埋納した火葬墓の可能性も否定できない。

出土遺物は湖州鏡１面、同安窯系青磁２点、白磁１点があり、同安窯系青磁のうち１点が小片であることを除き、他はほぼ完形品である。

この墓壙の築造年代は出土遺物から12Ｃ後半から13Ｃ前半と考えられる。



第8図　ST 50　実　測　図（1/20）

ＳＴ 18（第９図）

ＳＴ 18はＢ区のほぼ中央部にある。南北軸1.2m、東西軸0.8mを測る。底部は円形に近い隅丸長方形を呈する。掘方は比較的まっすぐに掘り下げられている。埋葬施設は所謂「座棺」であろう。

出土遺物がなく、時期は確定できないが、近世末頃ではないだろうか。

ＳＴ 21（第９図）

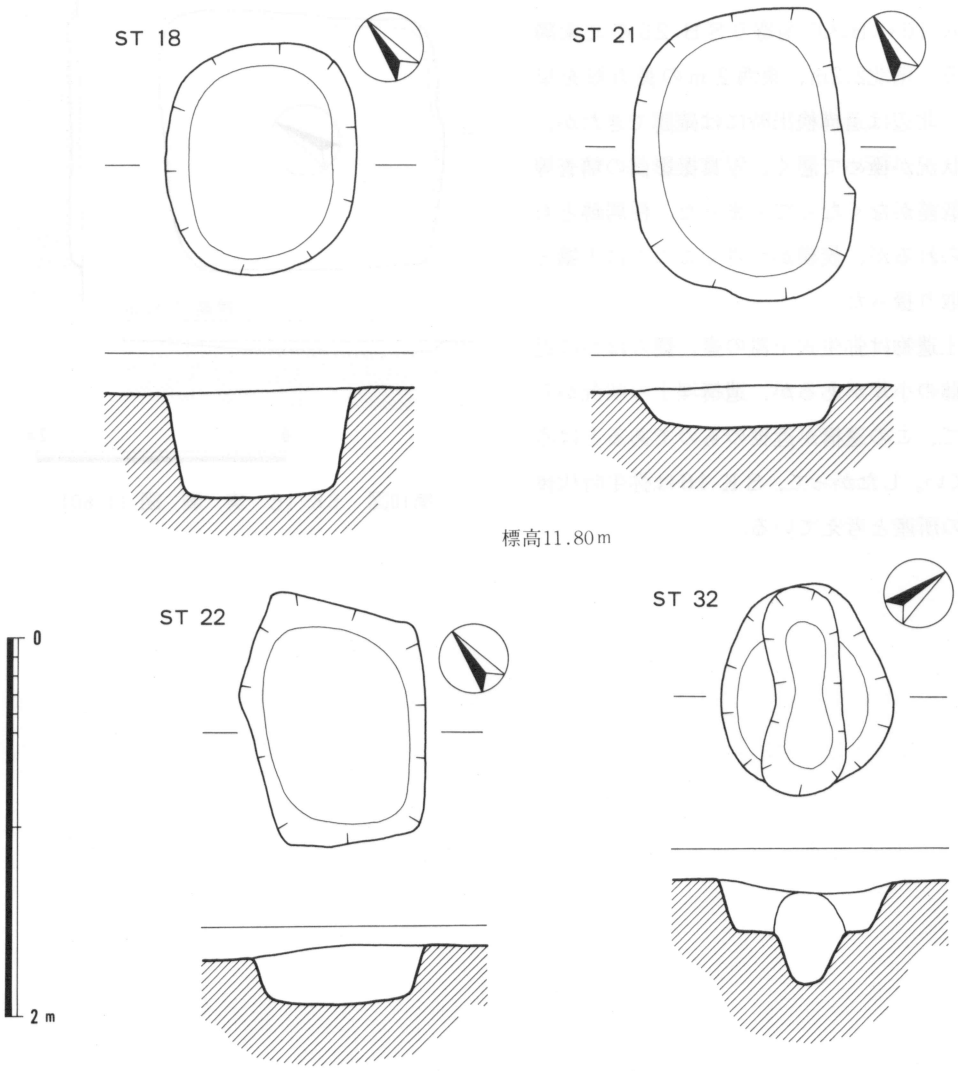
ＳＴ 21はＢ区のほぼ中央部、ＳＴ 18の東７mにある。南北軸1.6m、東西軸1.1mを測り、底部は円形に近い隅丸長方形を呈する。掘方は比較的まっすぐに掘り下げられている。埋葬施設はＳＴ 18と同じく所謂「座棺」であろう。

出土遺物がなく、時期は確定できないが、近世末頃ではないだろうか。

ＳＴ 22（第９図）

ＳＴ 22はＢ区の中央部、ＳＴ 21の東に隣接している。南北軸1.6m、東西軸1.1mを測り、底部は円形に近い隅丸長方形を呈する。掘方は比較的まっすぐに掘り下げられている。埋葬施設はＳＴ 18と同じく所謂「座棺」であろう。

出土遺物がなく、時期は確定できないが、近世末頃ではないだろうか。



第9図　ST 18・ST 21・ST 22・ST 32実測図（1/40）

ＳＴ 32（第９図、図版９）

ＳＴ 32はＢ区のほぼ中央部、ＳＴ 18の北５ｍにある。南北軸1.6m、東西軸1.1mを測り、底部は円形に近い隅丸長方形を呈する。掘方は比較的まっすぐに掘り下げられている。埋葬施設は所謂「座棺」であろう。

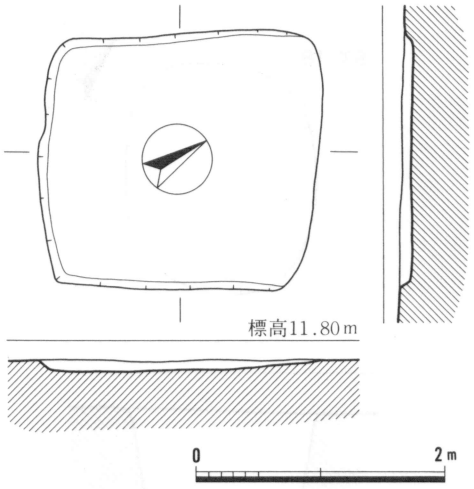
この墓壙は改葬後に、再度細長く掘られて墓石が２基廃棄されていた。

出土遺物がなく、時期は確定できないが、近世末頃ではないだろうか。

ＳＫ 16（第10図、図版６）

ＳＫ 16はＢ区の南寄りＳＢ 20の北東隣にある。南北2.2m、東西２ｍの長方形を呈する。北辺は遺構検出時には確認できたが、残存状況が極めて悪く、写真撮影前の精査等で高低差がなくなってしまった。住居跡とも考えられるが、規模が小さくここでは土壙として取り扱った。

出土遺物は弥生式土器の壷、甕のほかに近世の鉢の小片があるが、遺構埋土の状況から考えて、この遺構が近世のものであるとは考えにくい。したがって、ＳＫ 16は弥生時代後期頃の所産と考えている。



第10図　SK 16　実　測　図（1/60）

第Ⅲ章　遺　　物

今回の調査で出土した遺物を出土遺構ごとに報告する。

ＳＩ 40 出土遺物（第11・12図、図版10・11）

土師器（第11図１～13）

１～５は丸底杯である。すべて底部は手持ちヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整である。口径12.1～14.6cm、器高3.6～4.6cmを測る。１は竈から出土している。口縁部がわずかに外反し、体部と底部の境が屈折する。淡茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。２は外低部にヘラ記号があり、明るい赤褐色を呈す。３は竈から出土、やや厚手で色調は赤褐色、焼成・胎土は普通である。４はやや薄手で胎土・焼成ともに良い。５は竈より出土したものである。厚手で一見、手づくね風である。外面の手持ちヘラケズリは細かく施され、色調は暗茶褐色で、胎土は精選されている。

６は竈より出土の椀である。これも手づくね風で、内面をヘラケズリ、外面はナデ、口縁部は強いヨコナデにて整形している。口径12.5cmを測る。７は嘴状口縁をもつ蓋である。

８は丸底の鉢で完形である。口縁の一部が半月状に欠損しているが、廻りに粘土がナデつけたように付着しているので、補修後また剝落したものと考えられる。口縁直下に一条の浅い沈線がめぐる。色調は赤褐色で、胎土・焼成ともに良い。口径18.3cm、器高7.4cmを測る。

９・10は小型丸底壷である。体部は丸く張り、口縁部はわずかに外反する。ともに外面はハケ目、内面をヘラケズリし、口縁部はヨコナデにて調整している。胎土・焼成ともほぼ良い。９は灰茶褐色を呈し、外面に薄くススが付着している。口径は12.2cmを測る。10は赤色の化粧土を施している。肩部に不明瞭な稜線を有し、口径は11.8cmを測る。

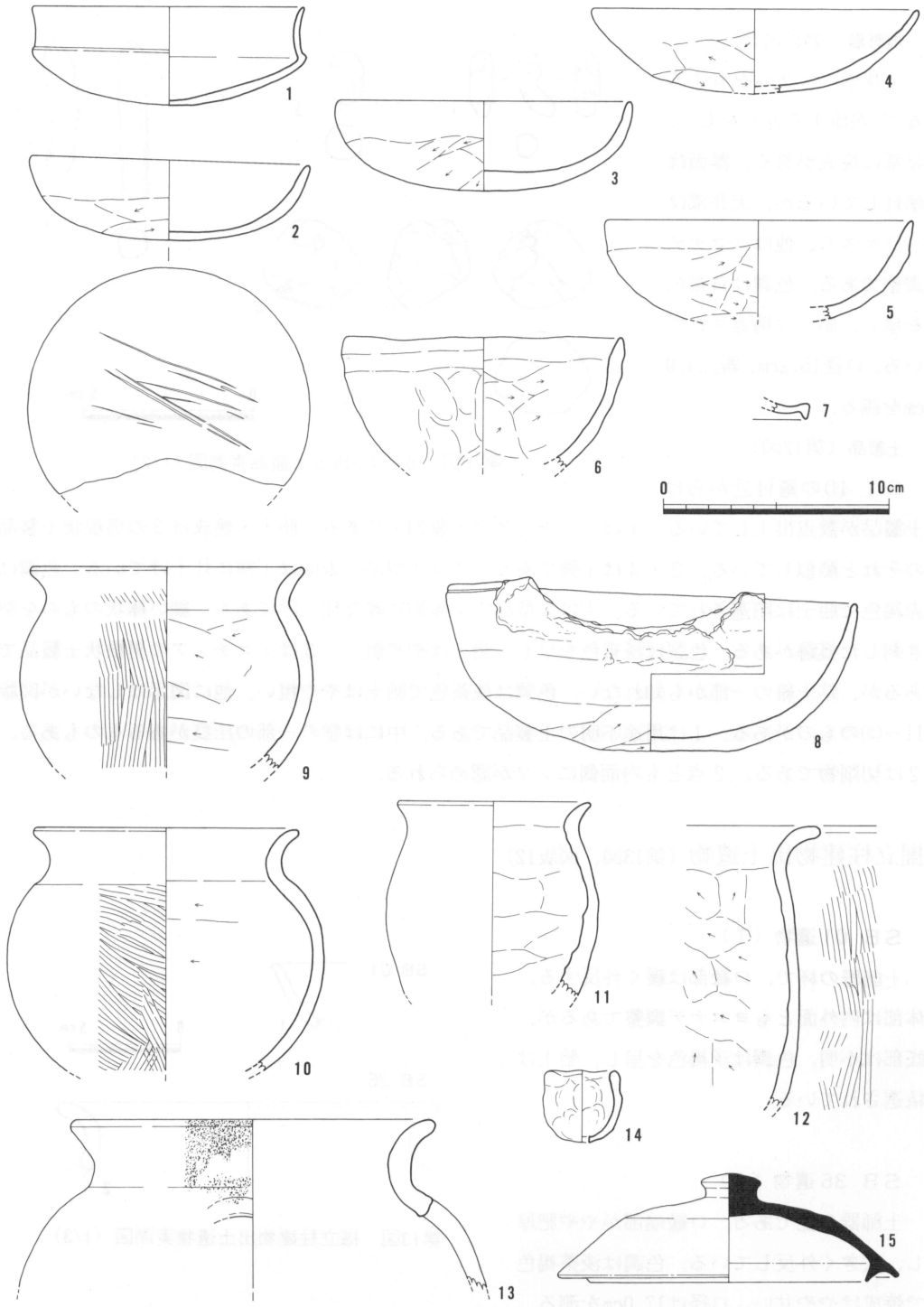
11も小型壷であるが体部の張り出しは少なく、手づくね風である。口縁部はヨコナデ調整、内面は指にて強くヨコナデし、鮮明な稜線が残る。口径は8.6cmで、色調は淡赤褐色を呈し、胎土は良好。

12は竈から出土の小型甕である。内面はヘラケズリ、外面は粗いハケ目調整後、一部ナデている。色調は暗褐色を呈し、焼成は良い。

13は肩部に円形の透かしを１個有する甕である。頸部が直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。外面の一部にはススが付着しているが用途は不明である。

手づくね土器（第11図14）

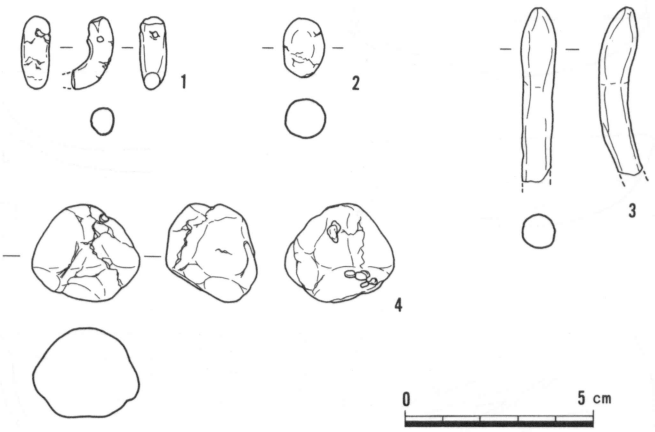
底部に穿孔があり、甑のミニチュアと思われる。色調は茶褐色で、胎土は精選されている。



第11図　SI 40出土遺物実測図（1/3）

須恵器（第11図15）

宝珠形のつまみを有する蓋で、内傾する返りをもつ。非常に焼成が悪く、器面は摩耗しているが、天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ調整である。色調は黄褐色を呈し、胎土は精選されている。口径15.2cm、器高4.9cmを測る。



第12図　SI 40出土土製品実測図（1/2）

土製品（第12図）

ＳＩ 40の竈付近からは土製品が数点出土している。１はミニチュアの土製勾玉である。胎土・焼成は３の男根状土製品のそれと酷似している。２・４は土弾である。２は小型品で表面は丁寧に仕上げている。色調は赤褐色で胎土は精選されている。４は大型品で全体的に雑な仕上げである。細い棒状のものを突き刺した痕跡がある。色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。３はミニチュアの男根状土製品であるが、粘土紐の一部かも知れない。色調は淡茶色で胎土はやや粗い。他に図示はしないが図版11－(3)のものがある。１は用途不明の土製品である。中には掌の一部の圧痕があるものもある。２は切削物である。２点とも内面側にシワが認められる。

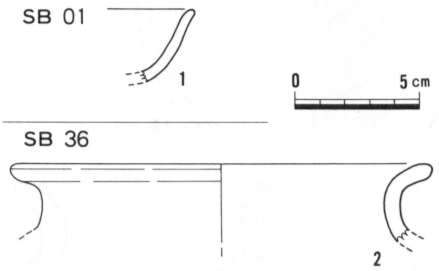
掘立柱建物出土遺物（第13図、図版12）

ＳＢ 01遺物（１）

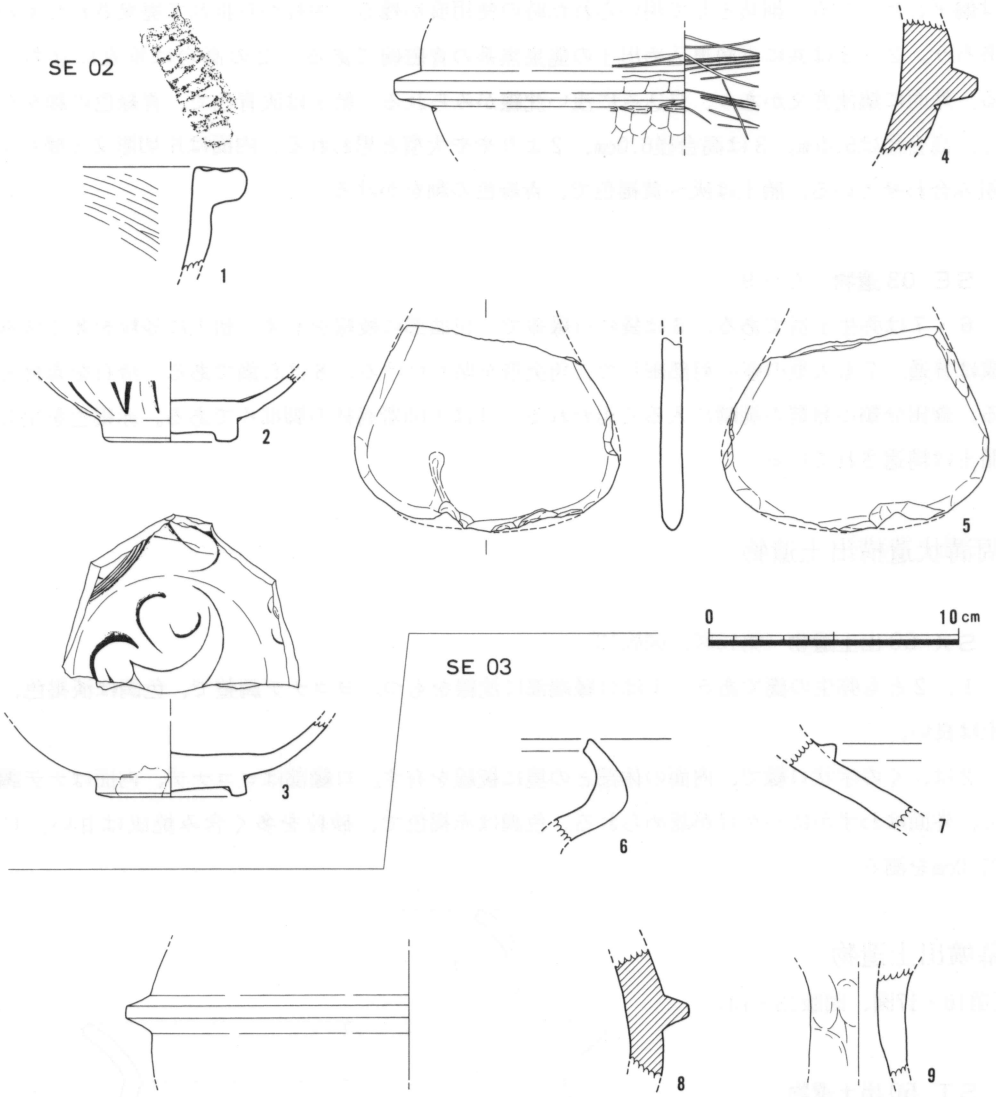
土師器の杯で、口縁部は緩く外反する。体部は内外面ともヨコナデ調整であるが、底部は不明。色調は淡褐色を呈し、胎土は精選されている。

ＳＢ 36遺物（２）

土師器の甕である。口縁端部がやや肥厚し、大きく外反している。色調は淡茶褐色で焼成はやや甘い。口径は17.0cmを測る。



第13図　掘立柱建物出土遺物実測図（1/3）



第14図　井戸出土遺物実測図（1/3）

井戸出土遺物（第14図、図版12・13）

ＳＥ　02遺物（１～５）

１・４・５は上層出土である。１は土鍋の口縁部で上面に刻目文を施す。色調は灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含み焼成はやや不良。

４は石鍋である。石材には滑石を用いている。森田分類のＣ群の範疇(註1)に入るものであろう。５

は偏平石斧である。掘具として用いられた時の使用痕が残る。中程から折れて廃棄されたものであろう。2・3は共に下層裏込め出土の龍泉窯系の青磁碗である。2の高台は垂直に立ち上がる。外面に鎬蓮弁文があり、見込みに浅い沈線がみられる。胎土は灰青色で、青緑色の釉をかける。高台径は5.4cm。3は高台径6.0cm、2よりやや大型と思われる。内面は片切彫文と櫛目文を組み合わせている。胎土は灰～黄褐色で、青緑色の釉をかける。

SE 03遺物（6～9）

6・7は弥生土器である。6は袋状口縁壷で、屈曲部に稜線を有す。胎土に砂粒を多く含み焼成は普通。7も大型の壷の肩部細片で三角突帯を貼り付ける。8は石鍋である。滑石を素材とする。森田分類のB群の範疇(註1)に入ると思われる。9は土師器高杯の脚部片である。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。

周溝状遺構出土遺物

SX 60出土遺物（第15図、図版13）

1、2とも弥生の甕である。1は口縁端部に沈線をもつ。ヨコナデ調整で、色調は淡褐色、胎土は良い。

2は、くの字状口縁で、内面の体部との境に稜線を有す。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整で、外面はわずかにハケ目が認められる。色調は赤褐色で、砂粒を多く含み焼成は甘い。口径21.0cmを測る。

墓壙出土遺物

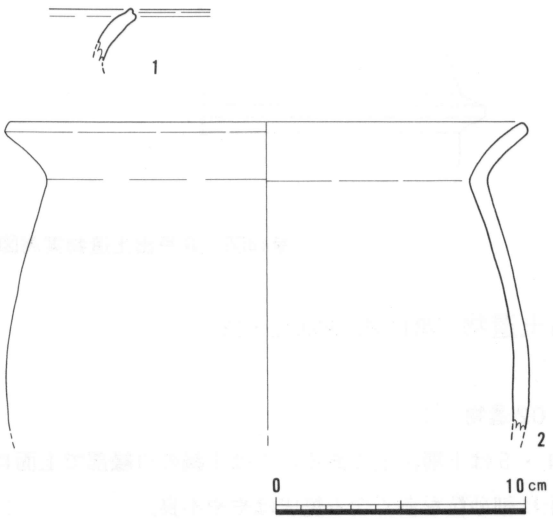
（第16・17図、図版13・14）

ST 50出土遺物

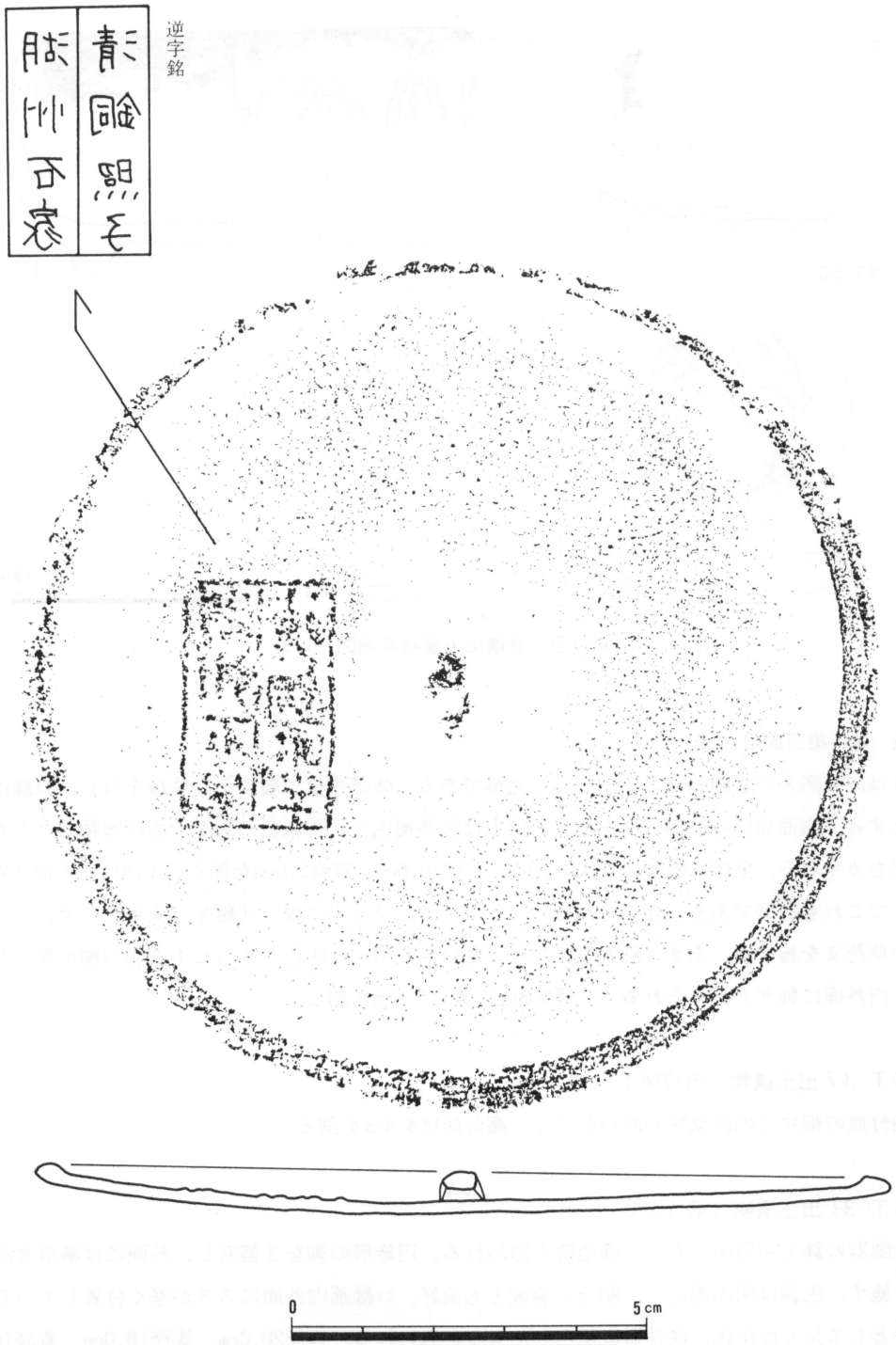
（第16図、第17図3・4）

湖州鏡（第16図）

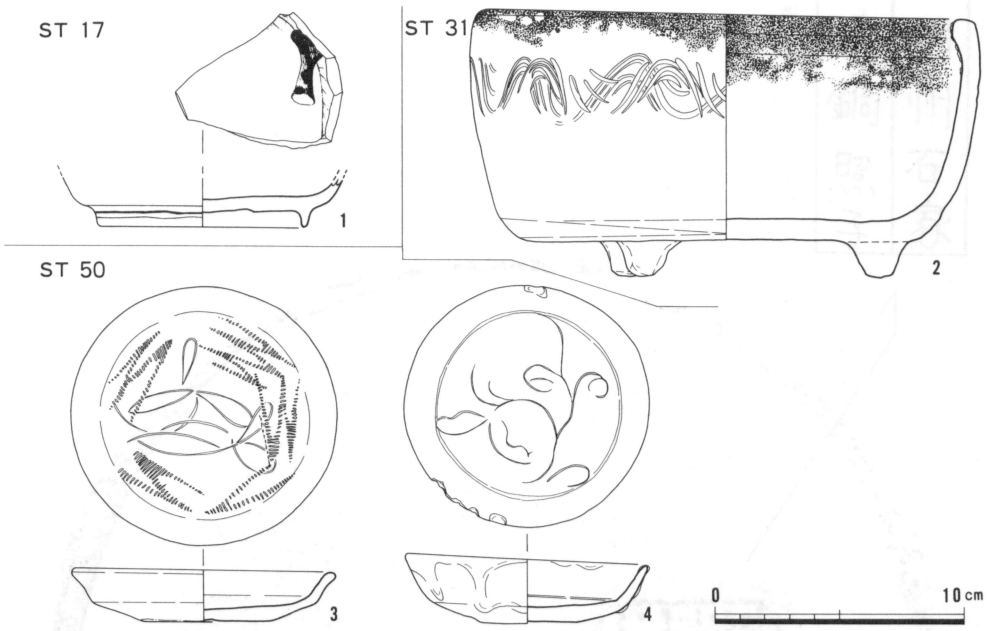
完形品で、鏡面を上にして出土した。背面には逆字の銘がある。鈕は長さ1cm、幅0.5cmの台形状で、鈕孔には紐が締ばれた状態で遺存している。



第15図　SX 60出土遺物実測図（1/3）



第16図　ST 50出土湖州鏡実測図（1/1）



第17図　墓壙出土遺物実測図（1/3）

磁　器（第17図３・４）

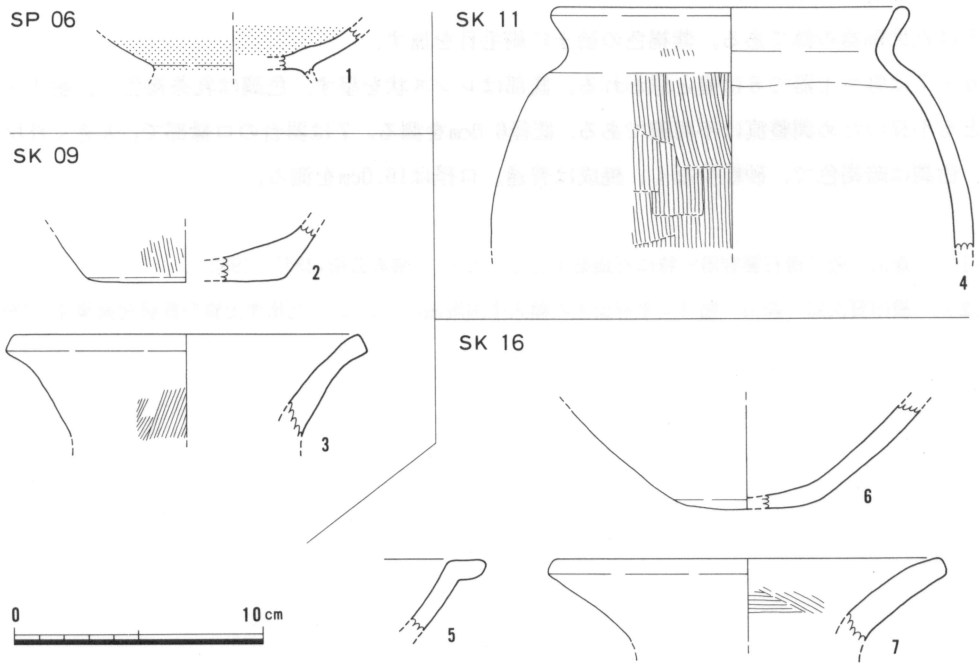
３は同安窯系の青磁の皿（Ⅰ－２）[註2]で完形である。体部中位で緩やかな稜線を有し、口縁部は外反する。内面見込みに櫛目文を施す。胎土は乳茶褐色で、青緑色の釉を全面に施釉したのち外底部をカキ取る。全体に粗めの貫入が入る。口径10.6cm、器高2.0cmを測る。４は白磁の皿（Ⅷ－１）でこれも完形[註2]である。底部は回転ヘラケズリで、見込みに浅い沈線を一条めぐらせ、ヘラ描きの草花文を施すが、あまり鮮明ではない。乳白色の胎土に灰色がかった不透明の釉が厚くかかり、内外面に釉ダレがみられる。口径9.8cm、器高2.8cmを測る。

ＳＴ　17 出土遺物（第17図１）

染付皿の細片で内湾気味の高台がつく。高台径は8.4cmを測る。

ＳＴ　31 出土遺物（第17図２）

土師器の鉢で完形品である。蒲池焼と思われる。円錘形の脚を３個有し、外面には櫛描き波状文を施す。色調は明赤褐色で、胎土・焼成とも良好。口縁部内外面にススが厚く付着している。火舎として長く使用後、蔵骨器に転用したものと思われる。口径20.0cm、底径16.0cm、器高10.7cmを測る。



第18図　ピット・土壙出土遺物実測図（1/3）

ピット・土壙出土遺物（第18図、図版14）

ＳＰ 06遺物（1）

黒色土器Ｂの椀の細片である。内外面にヘラミガキ痕が認められる。胎土は精選され、焼成は普通。

ＳＫ 09遺物（2・3）

2・3ともに弥生土器である。2は壷の底部と思われる。外面はハケ目、内面はナデ調整を行う。色調は茶褐色で、焼成は良い。底径8.0cmを測る。3は器台の細片で、口縁部は外反する。外面は細かいハケ目、内面はナデ調整を行う。茶褐色～淡褐色を呈し、胎土は砂粒少なく焼成も良好である。口径は14.5cm。

ＳＫ 11遺物（4）

弥生土器の壷である。口縁部は「く」の字状で、やや内湾気味である。肩部に緩やかな稜線を有する。外面はハケ目が鮮明で、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整を行う。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。口径は14.4cmを測る。

ＳＫ 16遺物（５～７）

５は近世陶器の鉢である。紫褐色の胎土に刷毛目を施す。

６・７は弥生土器で６は壷と思われる。底部はレンズ状を呈す。色調は乳茶褐色で、胎土・焼成とも不良のため調整痕は不明瞭である。底径6.0cmを測る。７は器台の口縁部で、大きく外反する。色調は暗褐色で、砂粒少なく、焼成は普通。口径は16.0cmを測る。

（註１）　森田　勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」 佛教芸術148号　1983

（註２）　横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」 九州歴史資料館研究論集４　1978

第Ⅳ章　小　　結

遺　構

今回調査した遺構について個別にまとめてみることにより小結としたい。

住　居　跡

ＳＩ 40　この住居跡は竈を西にもつ竪穴式住居跡である。一度掘方を荒く掘り下げた後に床面を平担にするために凹みに床を貼るという、７Ｃ前半の一般的な築造方法をとっている。貼り床と住居跡掘方の間で出土土器の傾向に差が認められないことから、この住居は造られてから比較的早い時期にその機能を失っていることが推察される。では何故短期間に使用を終えているのかを考えねばならないが、今回調査した限りではその理由を明らかにすることができなかった。この原因について今回の調査で判ったことは、この住居が火災にあった痕跡はなく、火災以外の原因で住居を廃絶していることのみである。

また、この住居の上部構造についてであるが、この住居には周囲に径10cm程度のピットが掘方のラインに沿って並んでいる。このピットは住居に伴うものであることは埋土などからほぼ間違いない。住居の掘方に添って並んでいることから、屋根材の「受け」または壁の縦材であると考えられ、ピットが斜めではなく垂直に掘られていることから壁の縦材である可能性が高いといえる。また壁の構造については、次の一試案を挙げておきたい。

まず、縦材の痕跡が間隔をあけて並んでいることから、横材を積み上げて縦材で要所を固定する方法が考えられる。またピットが１列で並んでいることから、横材を２本の縦材で挟んで固定することは考えにくく、１本の縦材に横材をしばって固定したと考えられる。尚、縦材が横材の内側か外側かについては決め手を欠いている。しかしながら、縦材の痕跡と思われるピットの径が10cm程度と比較的小さいことや、この住居が竪穴式住居の形式をとっていることから考えて、壁体はそれほど高いものではなく、低い壁を有する竪穴式住居であったものと考えている。

掘立柱建物

ＳＢ 01　13Ｃ頃の造営とみられ、ＳＥ 02・ＳＥ 03等とほぼ同時期のものである。この建物の特徴は、南北両面に庇を有するという点にある。13Ｃ頃の造営で２間×４間以上の規模を持ち、南北両面に庇を持つ建物は、武士の館か、郡役所級の役所の建物等が考えられる。柱穴が全体的に小さく、柱痕跡も15cm程度と小さいことや、関連する遺構が２基の井戸（ＳＥ 02・ＳＥ 03）のみであることから、郡役所等よりも、武士等の在地有力者の居宅である可能性が高かろう。郡役所級の建物であれば、周囲にも建造物が規則的に存在すべきであるが、ＳＢ 01以外には同時期の建物は見あたらない。

墓　壙

ＳＴ　50　この遺構は出土遺物から判断して、12Ｃ末から13Ｃ初頭頃と考えられるが、今回の調査では同時期の墓壙は確認されておらず、ＳＴ　50が単独で存在する。出土遺物は湖州鏡１面、白磁皿（Ⅷ－１）１枚、同安窯系青磁皿（Ⅰ－２）１枚がすべて完形であったほか、同安窯系青磁皿（Ⅰ類）の小片が出土している。（註１）３点共、伝世する可能性の高い品で、これらのものがセットで副葬されていることから、かなりの有力者を埋葬した墓壙であろうと推察している。また湖州鏡は鏡面を上にした状態で出土したことから、埋葬施設は木棺墓もしくは木蓋土壙墓で出土品は棺上副葬されたものであろう。埋葬施設については、遺構の残存状態が悪かったため断定はできないものの、副葬品の内容から考えて、木棺墓の方がふさわしいのではないかと考えている。

遺　物

今回の調査で出土した遺物は、全体的には一般的な日用雑器が中心である。その中でＳＩ　40出土の土製品とＳＴ　50出土の湖州鏡について触れてみたい。

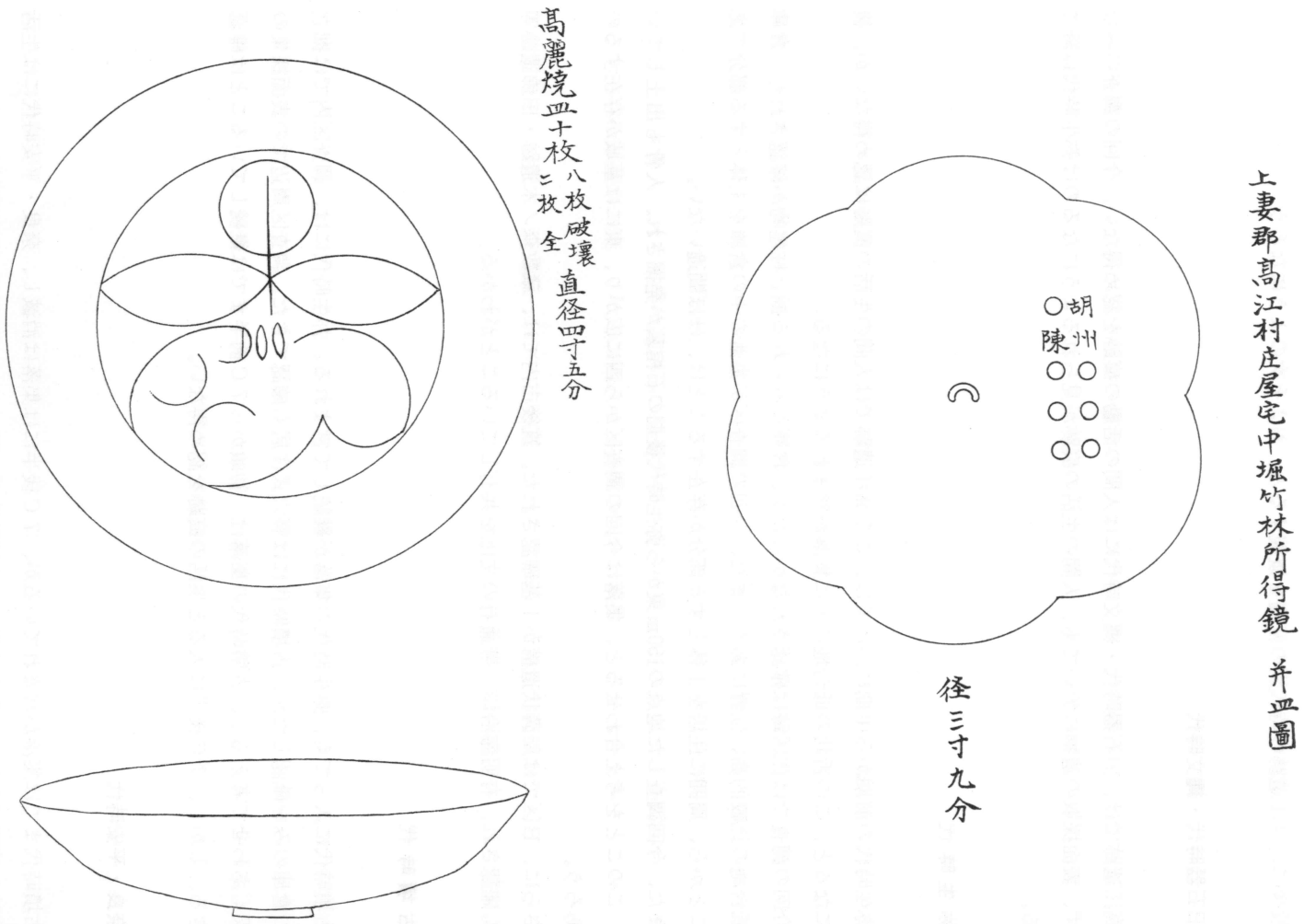
ＳＩ　40出土不明土製品

今回の調査では、用途不明の土製品がＳＩ　40の竈付近から出土している。土製品には切削物・男根状土製品・スサ等の圧痕のある粘土片等があり、すべて焼成している。第Ⅲ章でも述べた通り、男根状土製品は粘土紐の一部である可能性もあることも考えれば、これらすべてが土器の制作に係わるものであることになる。このことは、土器制作は集落のなかで行われたことの証である。しかしながら、今回の調査では土器焼成用の土壙は確認できなかった。また、スサ等の圧痕のある粘土片が多く含まれていることは、土器を成形する場所にはスサ・ワラ等が敷かれていたことを物語る。以上のことを参考にしながら、今後当時の生活風景を復元して行きたいと考えている。

ＳＴ　50出土湖州鏡

ＳＴ　50から出土した湖州鏡はほぼ完形の状態で出土した。鏡面を上にして出土したことから、棺上埋葬されたものが蓋の崩落に伴い転落したものと考えている。

また、「筑後将士軍談」には、高江地区出土の湖州鏡１面と同安窯系青磁１枚が紹介されている。（第19図）



第19図　参考資料：高江村出土遺物（「筑後将士軍談」から転載）

時代別概観

最後に、高江遺跡の時代別の変遷を概観すると、およそ次のようになろう。

旧石器時代・縄文時代

高江遺跡では、旧石器時代・縄文時代には人間の活動の痕跡を認め得ない。今回の調査のみならず、表面採取の遺物に於いても、人間の生活の痕跡が見られるようになるのは弥生時代以降である。

弥生時代

弥生時代の前期から中期にかけては、この高江遺跡では人間の生活の痕跡は認め得ないが、後期になると、この舌状の低台地の上に集落が営まれるようになる。

今回の調査では住居跡は確認されなかったが、倉庫とみられる掘立柱建物が確認された。倉庫は低台地の比較的高い位置にある。また、今回の調査区が集落の中の倉庫を主体とする部分であることから、周囲に住居を主体とする部分が存在することは、ほぼ間違いない。

また、今回調査した地点の150m東から弥生時代後期の石棺墓が発掘され、人骨も出土している。このことを考え合わせると、集落は今回の調査区から西に広がり、東には墓域が存在するのであろう。

さらに、B区では周溝状遺構が１基確認された。筑後市内では、蔵数森ノ木遺跡・田佛遺跡等でも確認され、有明海沿岸一帯通有の文化を共有していることがわかる。

古墳時代

古墳時代に入っても、弥生時代の集落が継続して営まれる。弥生時代には、調査区内では掘立柱の倉庫のみを確認したが、古墳時代には竪穴式住居も確認できた。調査区周辺での表面採集の成果もあわせて考えると、古墳時代の集落は、初頭から７Ｃ前半までは継続していることは確認できる。しかし、７Ｃ後半に入ると生活の痕跡を認め得ない。

奈良・平安時代

古墳時代までは集落が営まれているが、７Ｃ後半には集落は消滅し、奈良・平安時代には生活の痕跡を確認できない。弥生時代から古墳時代まで続いていた集落が、何故消滅し、またそこに

住んでいた人々は何処へ行ったのかということについては、今回の調査では明らかにすることができなかった。今後の調査の課題としたい。

鎌倉・室町時代

奈良・平安時代には途切れていた先人達の足跡が、再び現れるのは12C末である。丘陵の南裾に井戸が掘られ、生活が再開される。13Cに入ると、そのすぐ南側に井戸は移される。そして、新しい井戸のさらに南側には2間×4間以上の総柱の建物が建てられる。しかも、この建物は南北両面に庇が付くという堂々としたものである。有力者の居宅か、もしくは役所級の建物であろう。

また、13CにはＳＴ 50に代表されるように墓地も営まれはじめたようである。14C以後、この土地は墓地となり、住居が営まれることはなかった。

江戸・明治時代

13C後半に墓地が営まれるようになってから、江戸・明治時代を通じて、この土地は墓地であった。墓地は丘陵の頂上付近を中心に展開し、埋葬施設は所謂「座棺」を用いているものが多い。ただし、中には蒲池焼の火舎を蔵骨器に転用し、平瓦で蓋をした火葬墓も確認した。

大正・昭和時代

大正時代に入ると新しい墓の増加はあまり見られなくなる。そして、昭和に入り墓地の改葬が行われ、墓壙に墓石を投棄した例も見受けられる。

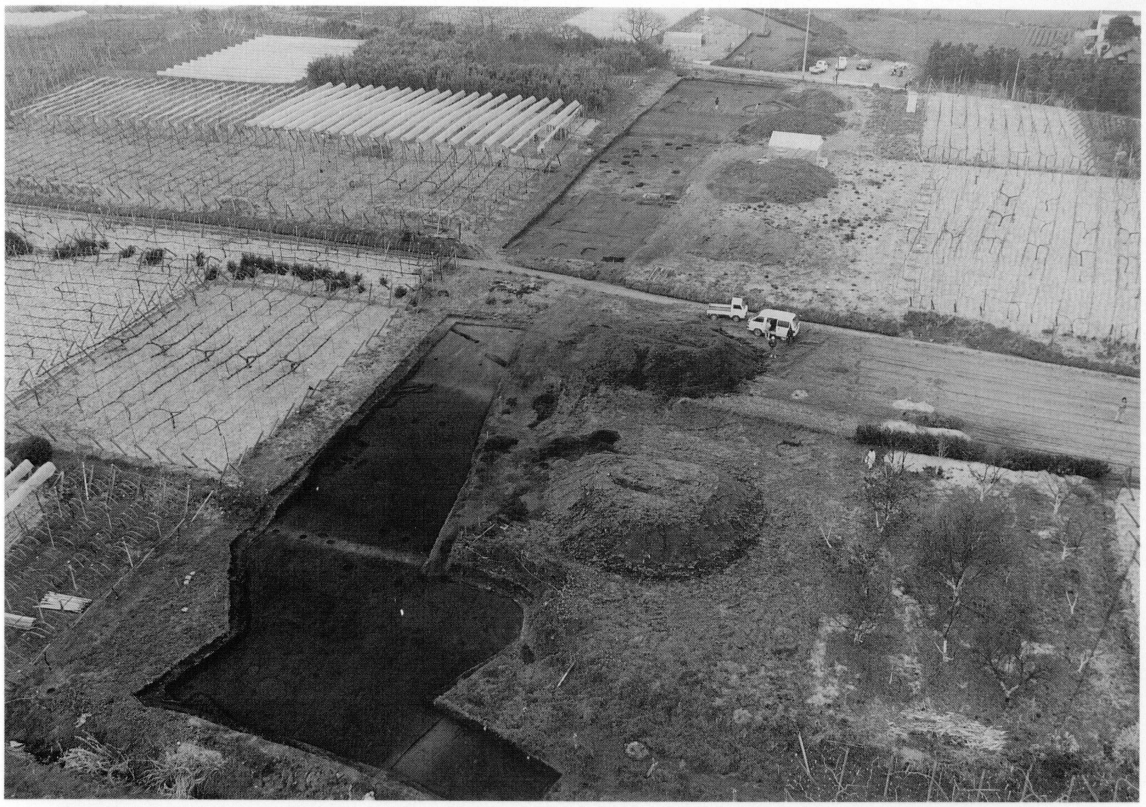
（註１）　横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」 九州歴史資料館研究論集４　1978

終章　結　　語

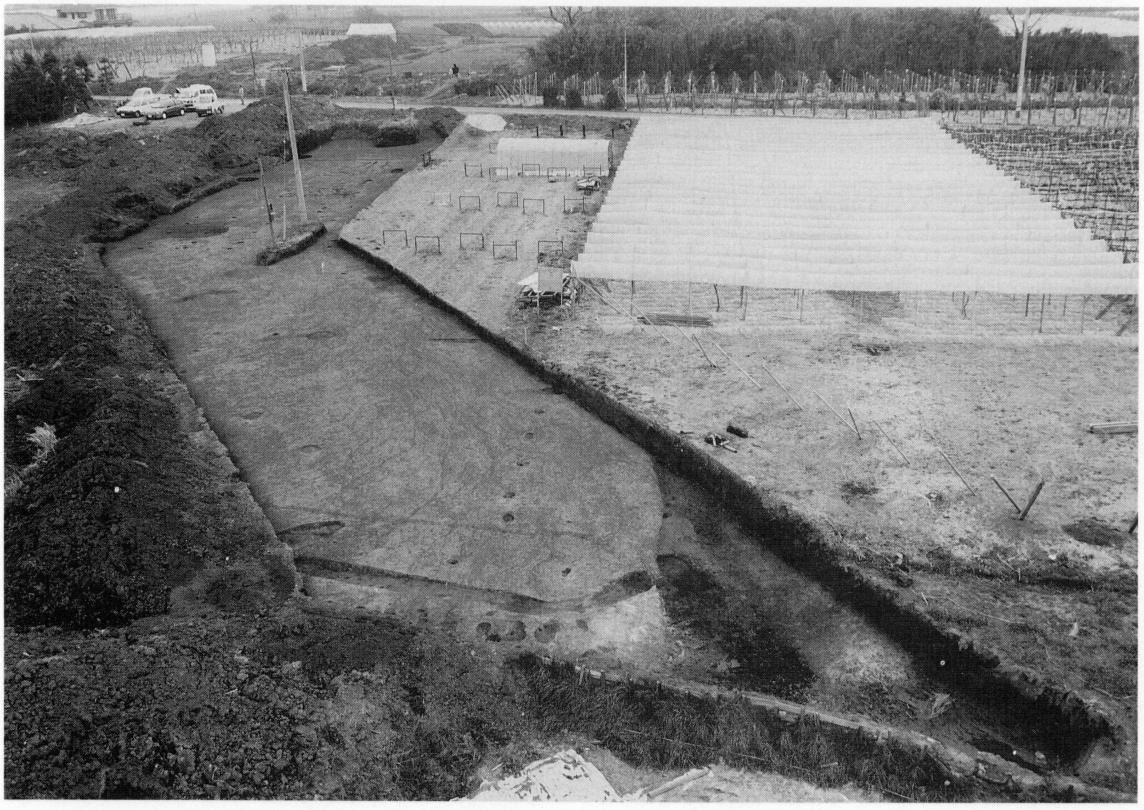
今回の調査では、古墳時代の住居跡や中世の建物をはじめ、多くの遺構を検出し、各時代についてさまざまなことが明らかになった。しかしながら、それと同時に先人たちの貴重な足跡が姿を消したのも事実である。我々は、この貴重な遺跡の一部が姿を消すときに見せた、一瞬のきらめきのなかで何を学び、何を得たのだろうか。

「温故知新」という言葉がある。先人たちの歴史から、これから進みゆく道を見つける努力を続けなければならない。その時、歴史は科学になる。

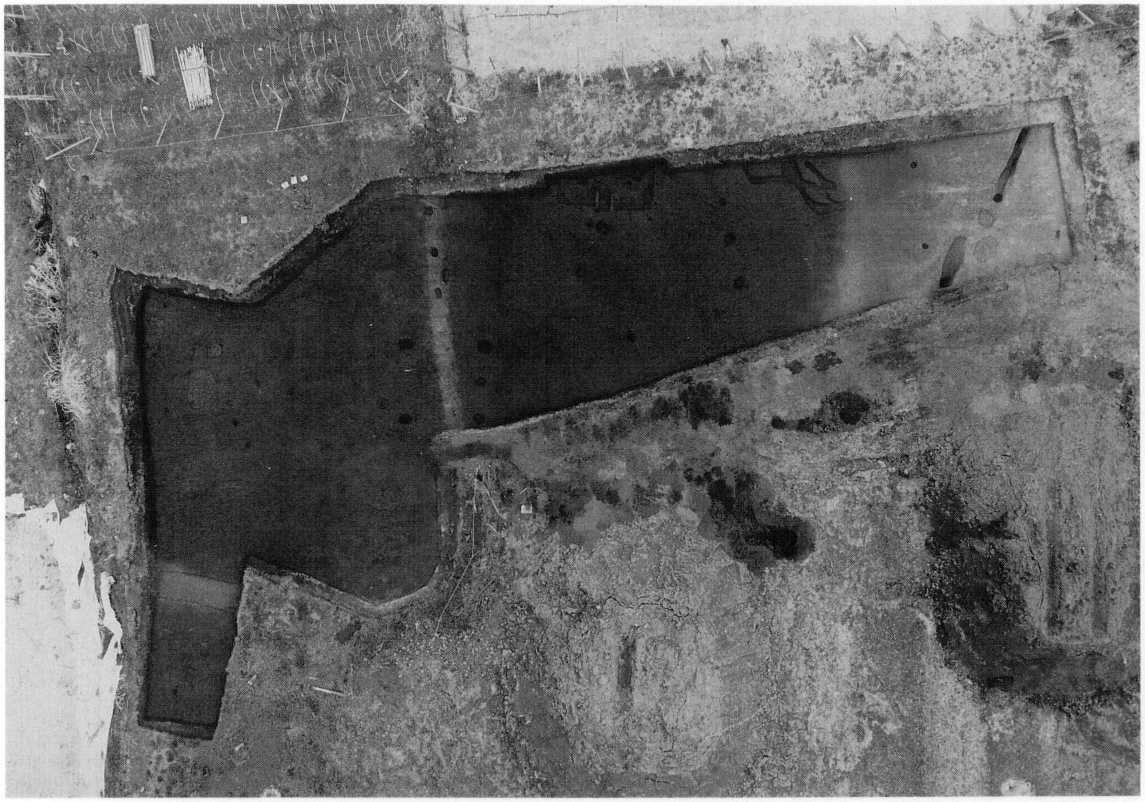
図　　版



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

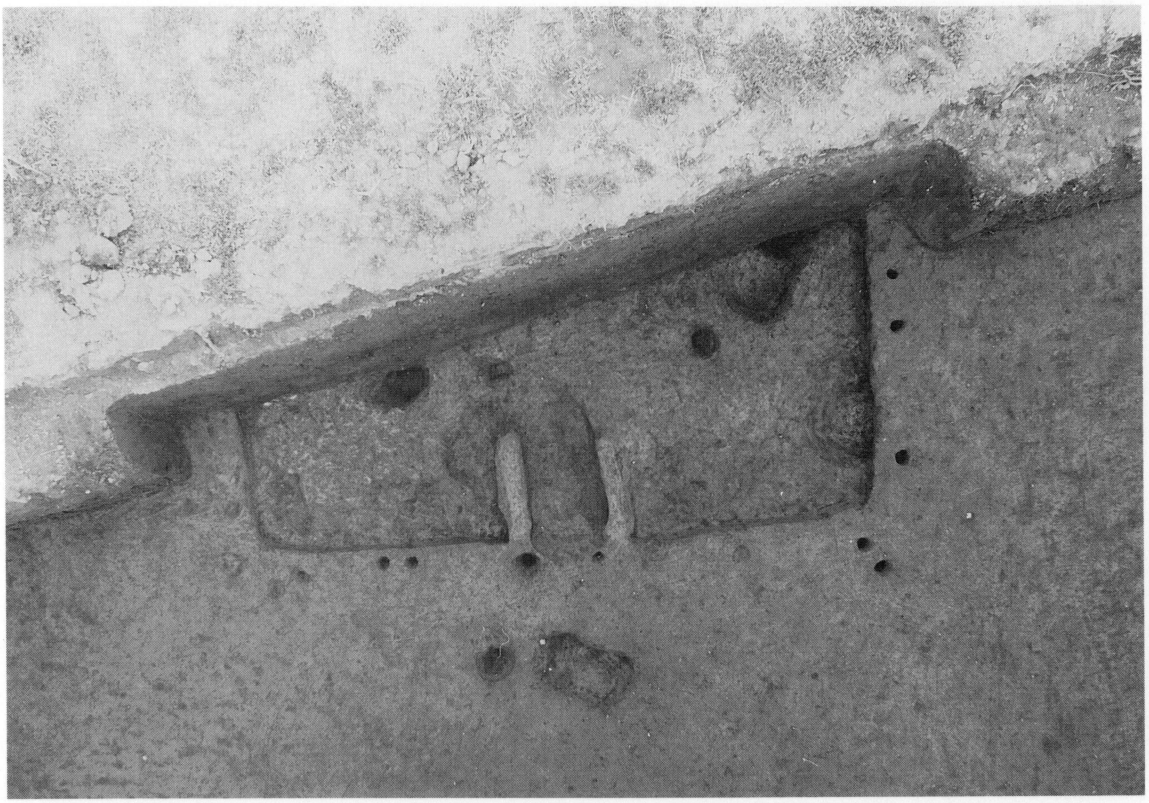


A区全景（空中写真）

B区全景（空中写真）

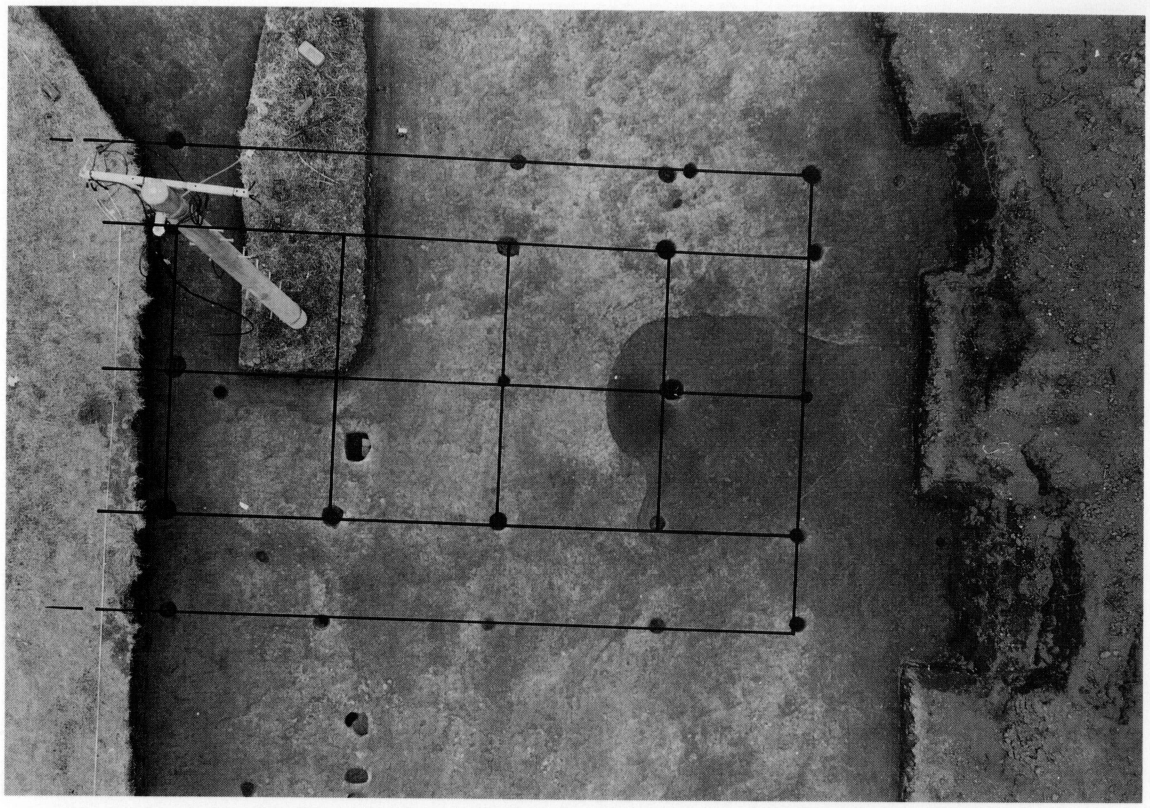
C区全景（空中写真）

SI 40土器出土状態

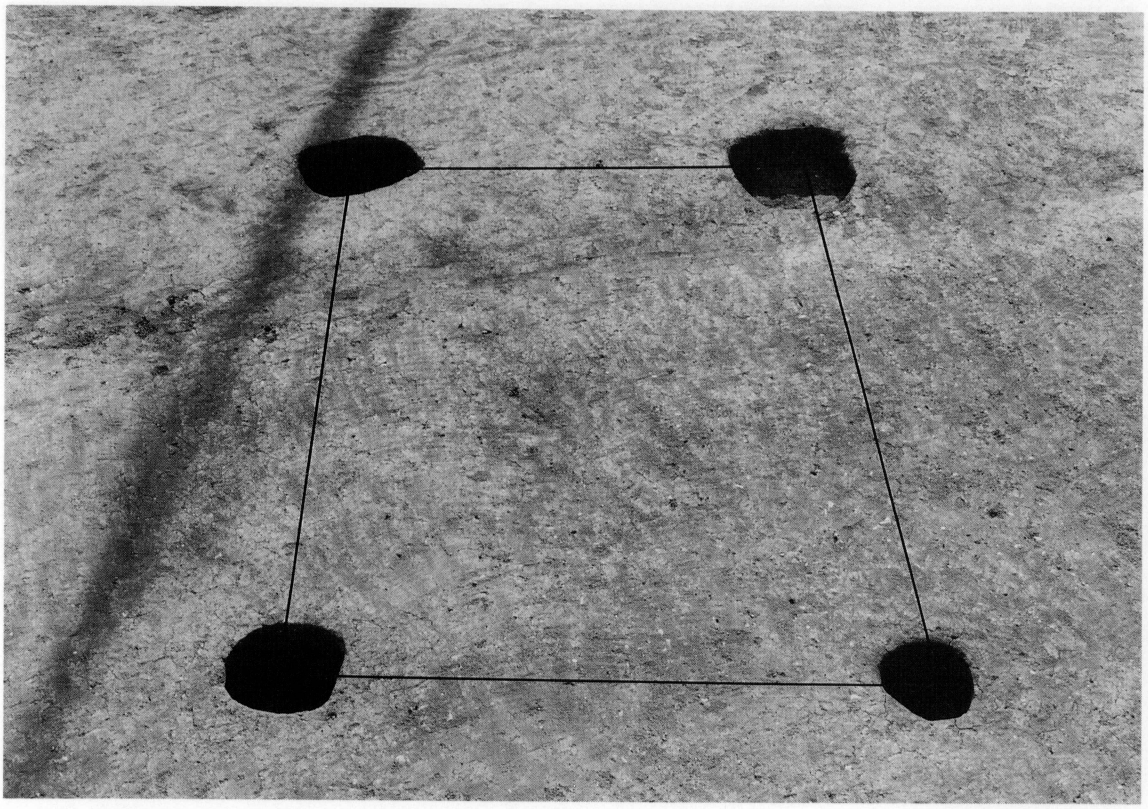


SI 40（空中写真）

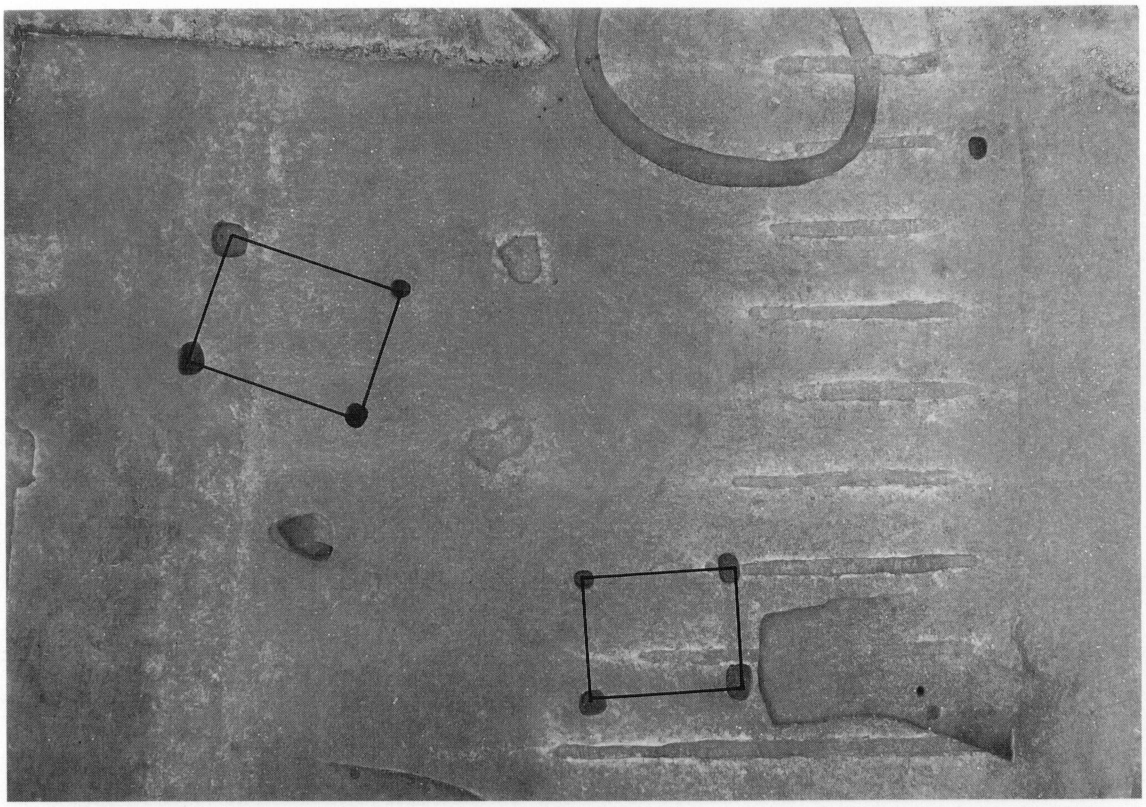
SI 40 竈　部　分



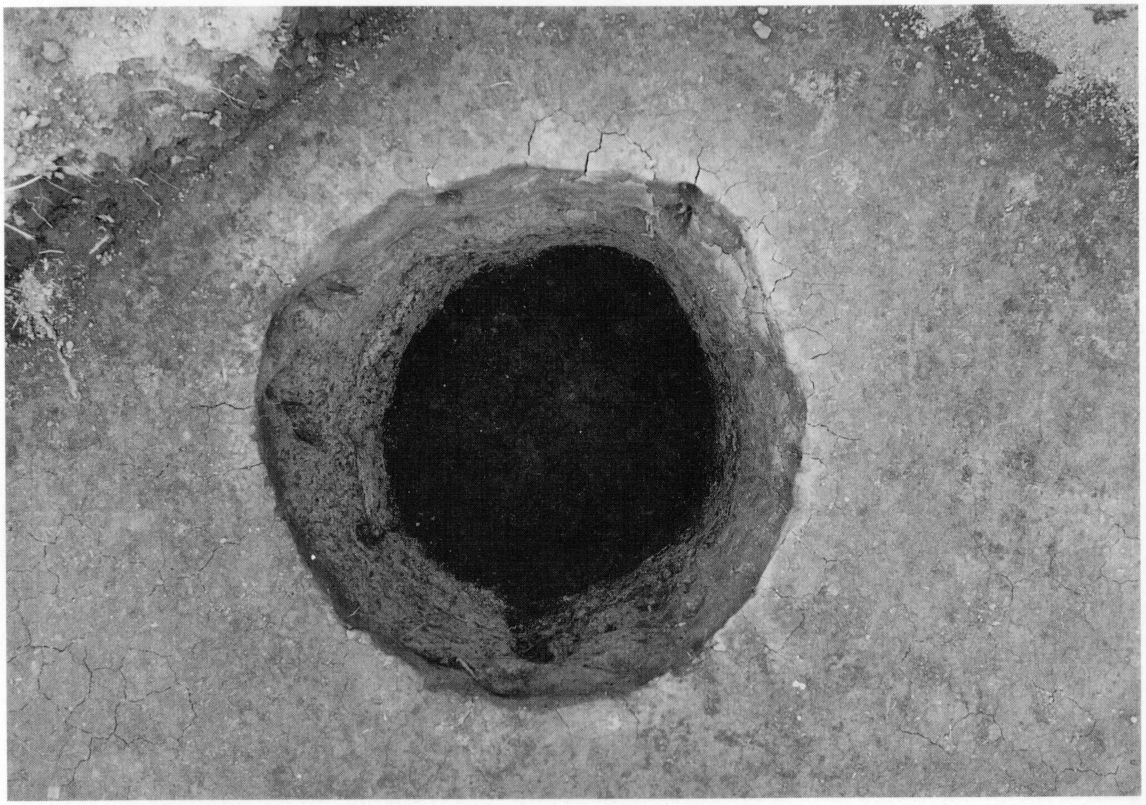
SB 01（空中写真）



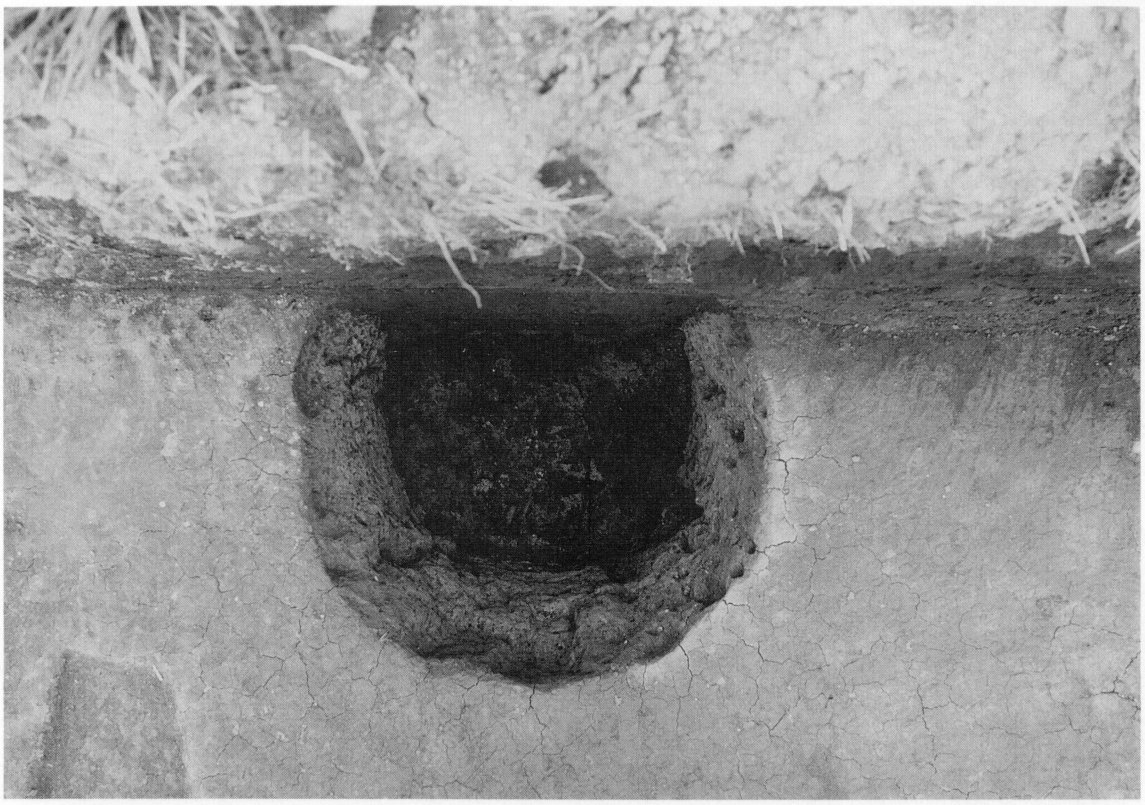
SB 10（南西から）



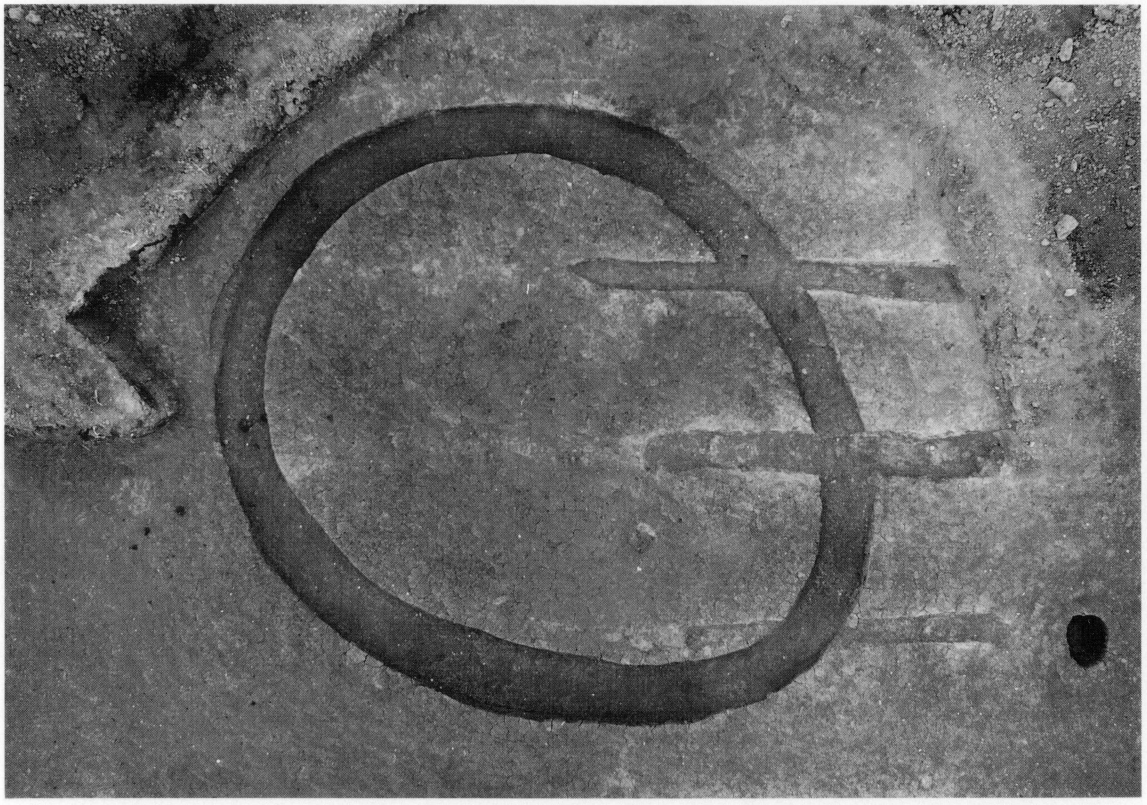
SB 10・SB 20・SK 16（空中写真）



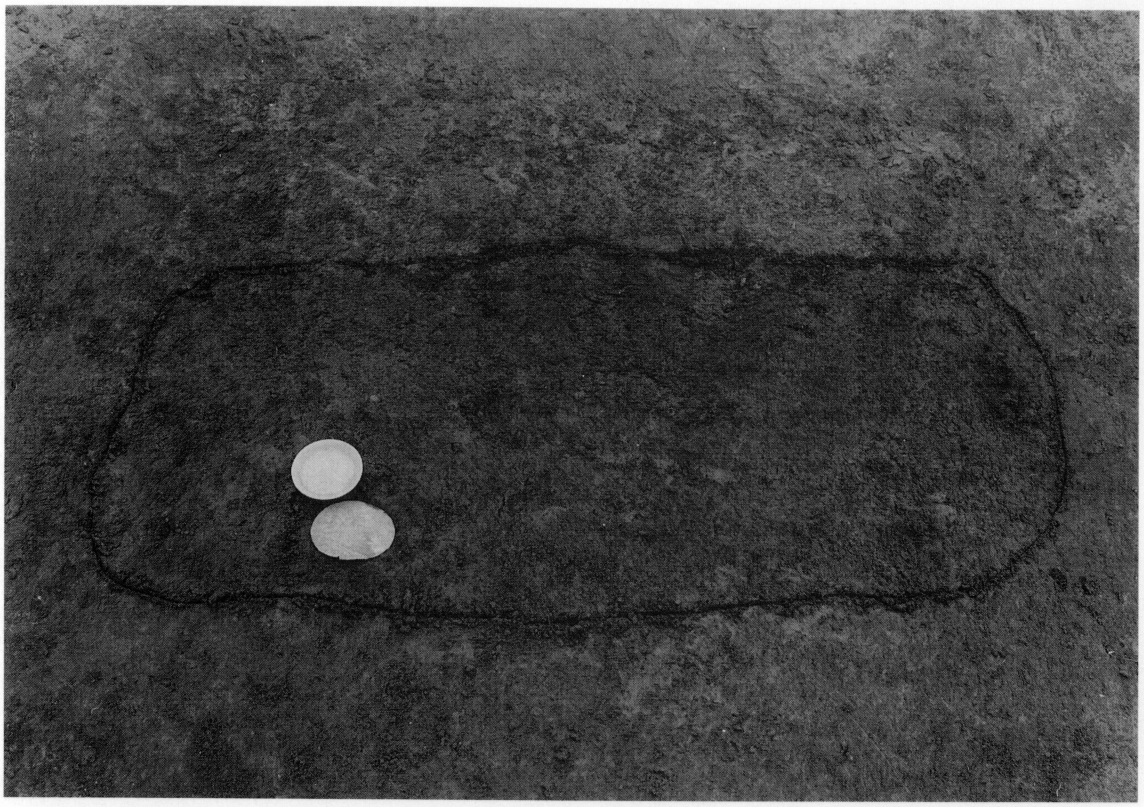
SE 02（空中写真）



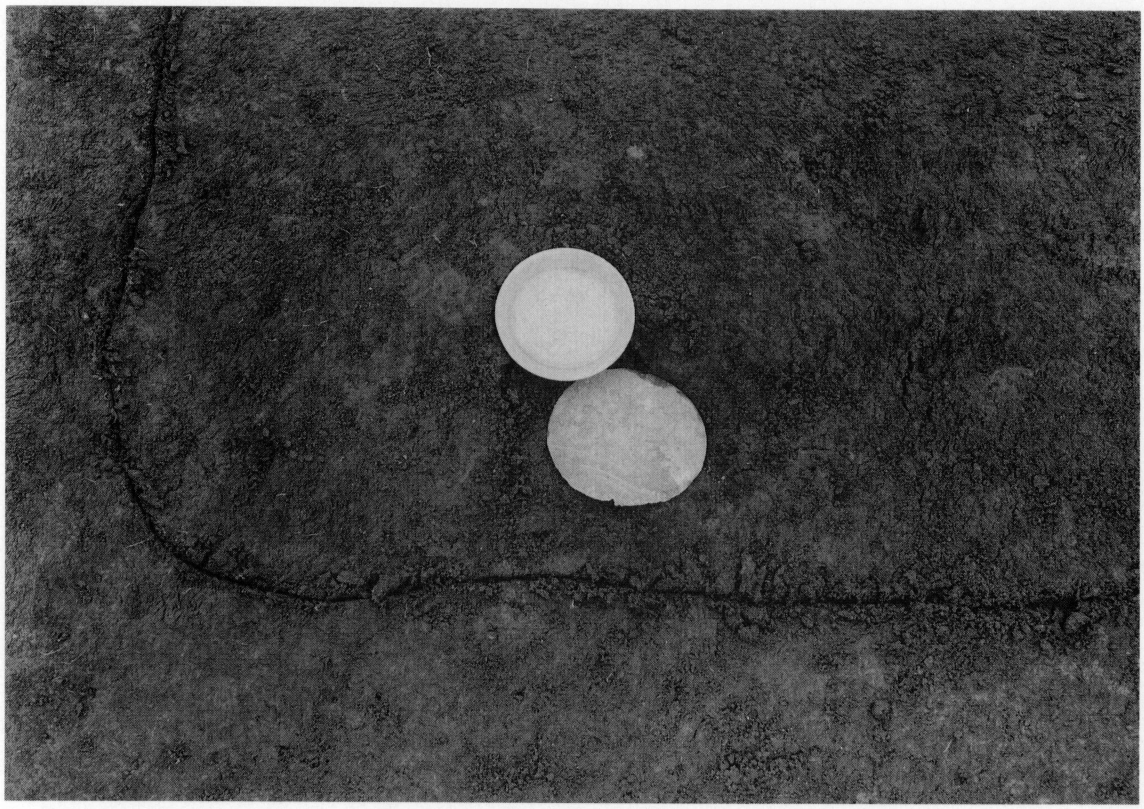
SE 03（空中写真）



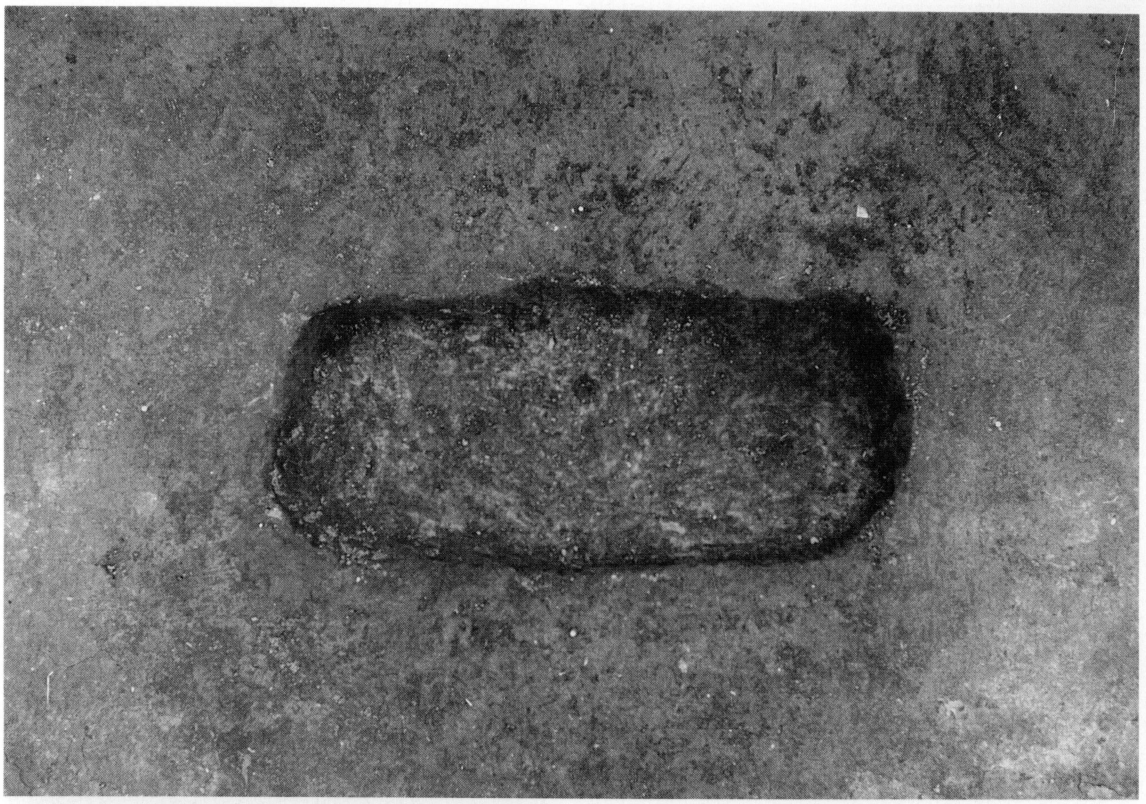
SX 60（空中写真）



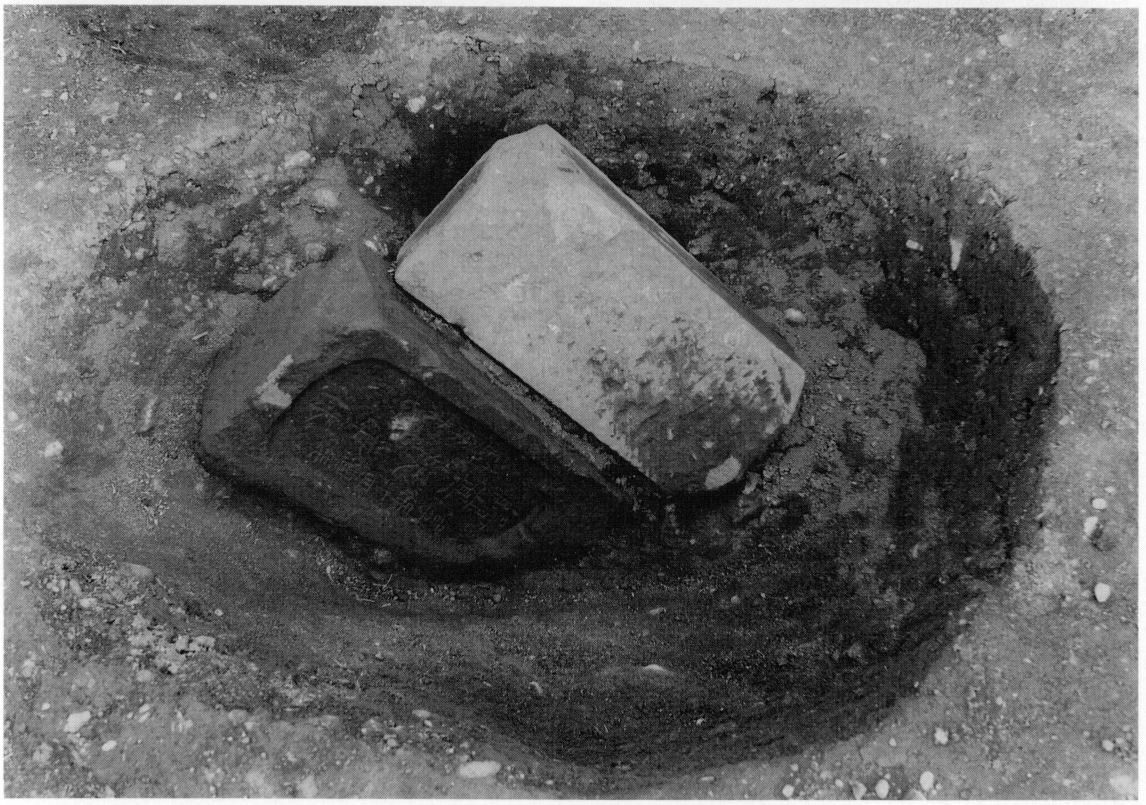
ST 50検出状態



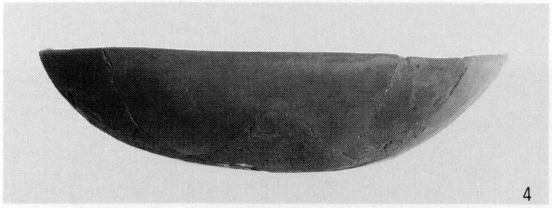
ST 50遺物出土状態

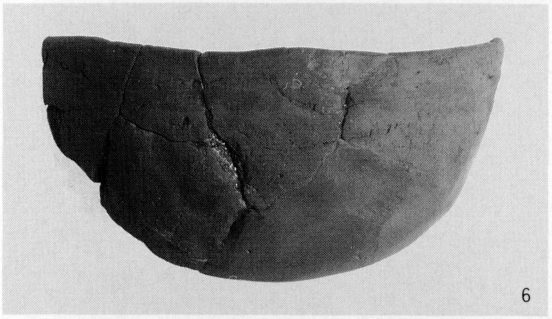


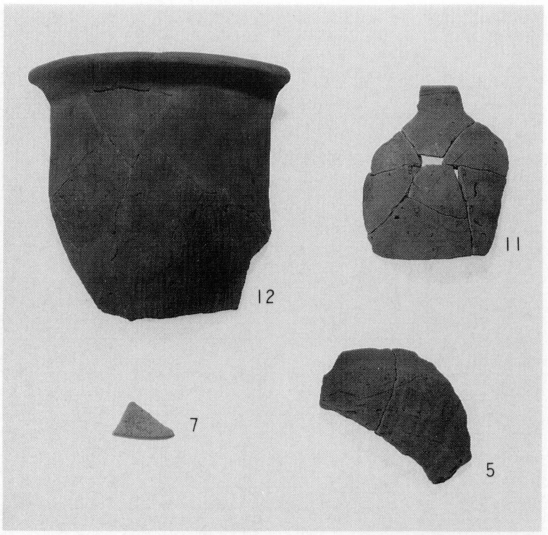
ST 50（空中写真）

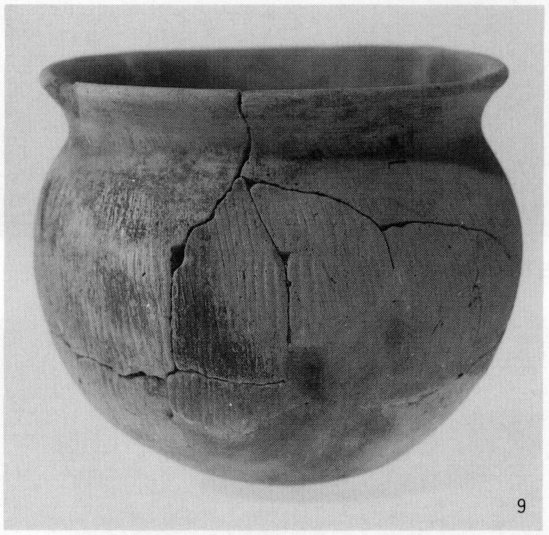


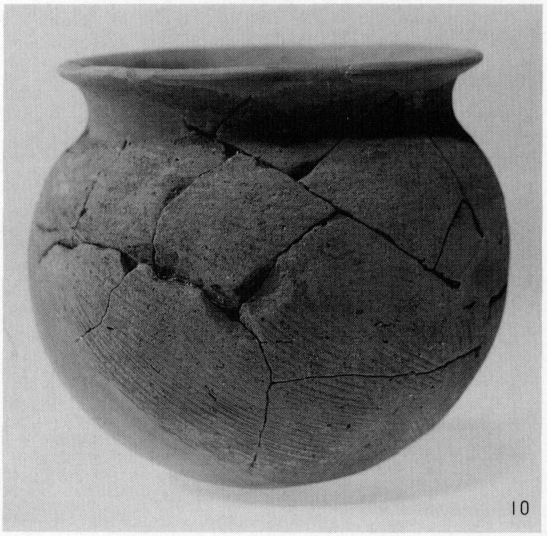
ST 32墓石出土状態



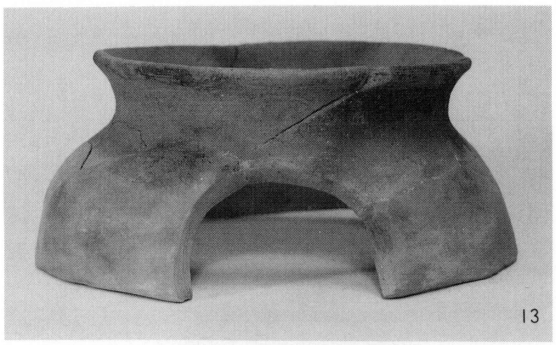


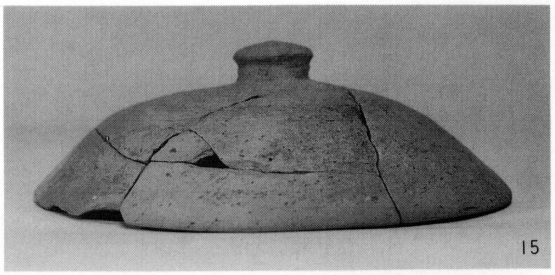


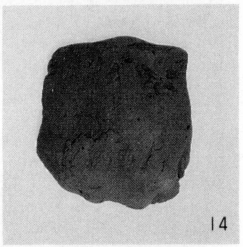




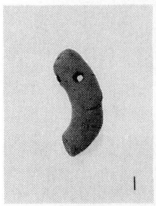
SI 40出土遺物①

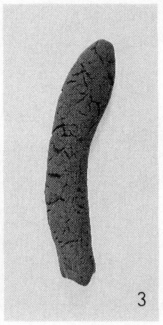




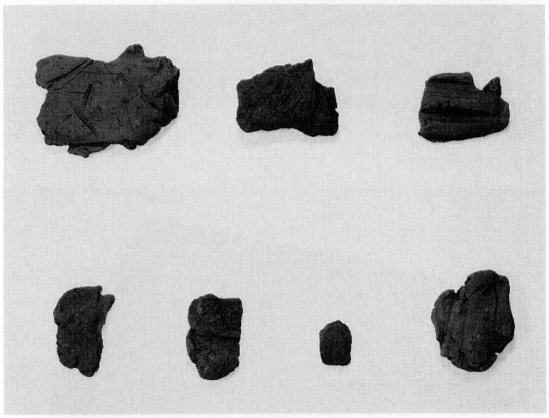


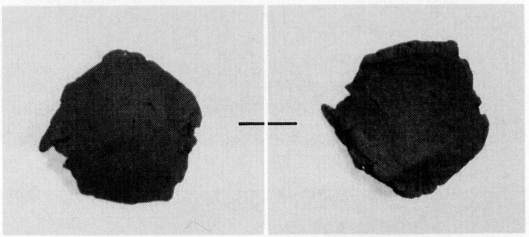
(1) SI 40出土遺物②

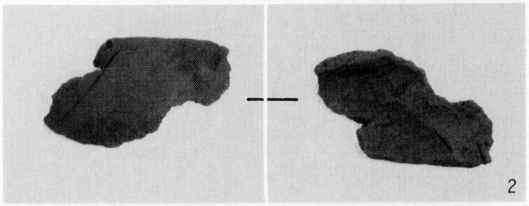


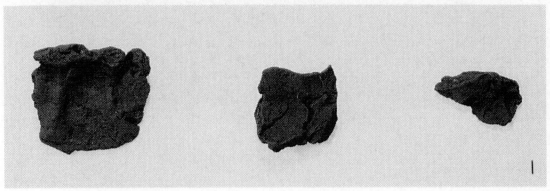


(2) SI 40出土土製品

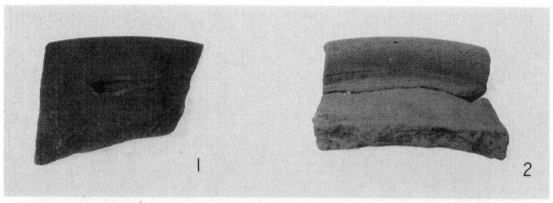




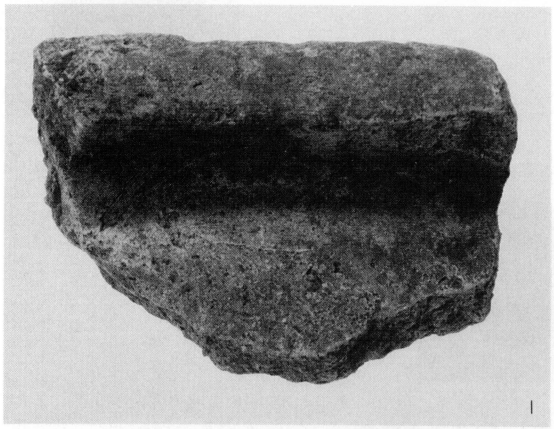


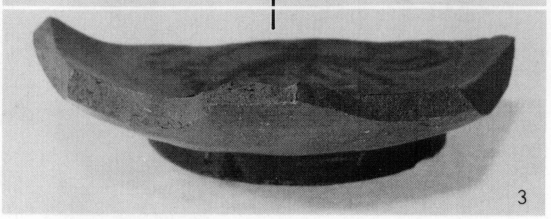


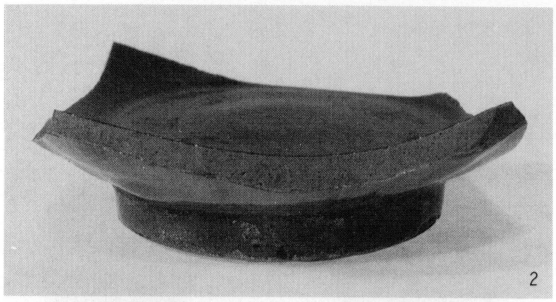
(3) SI 40出土不明土製品

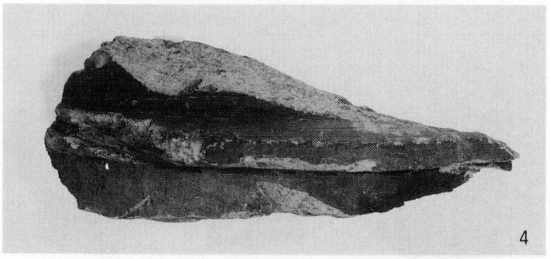


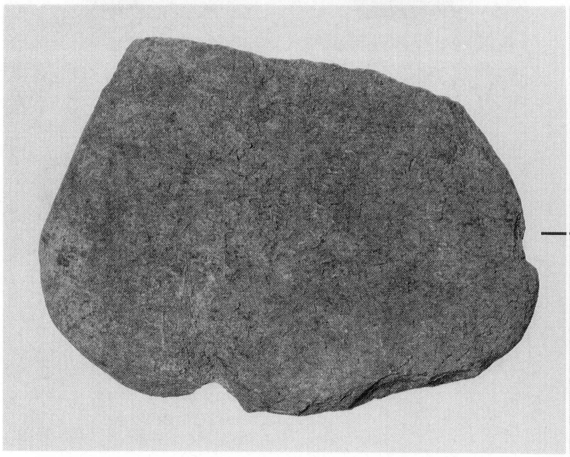
(1) 掘立柱建物出土遺物

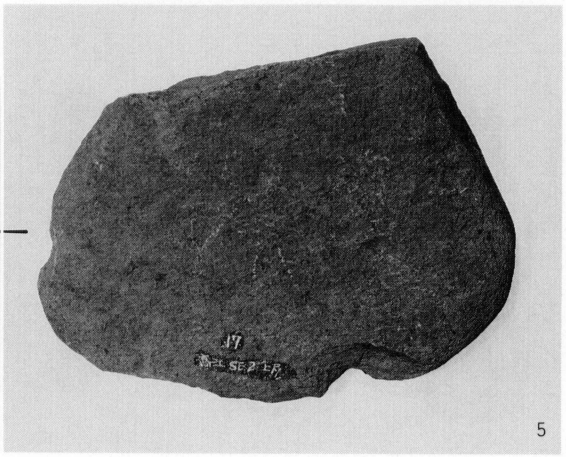




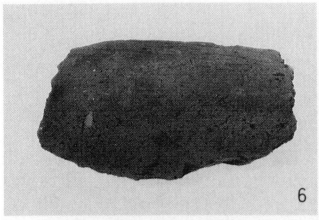


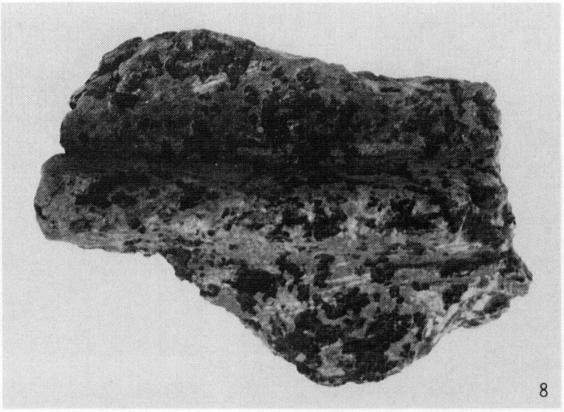


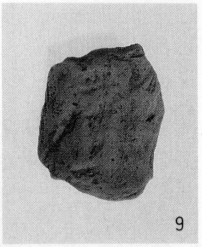


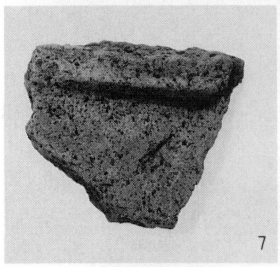


(2) 井戸出土遺物①

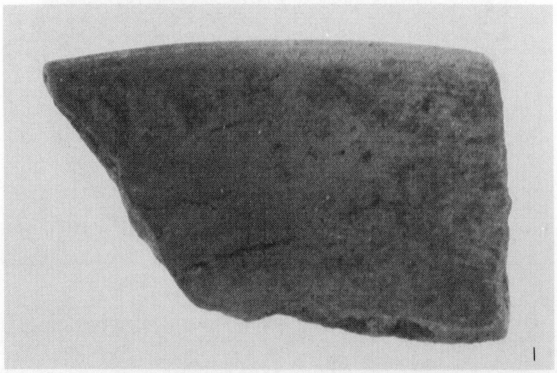


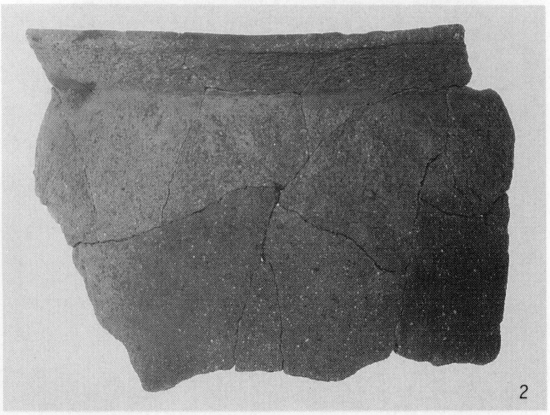






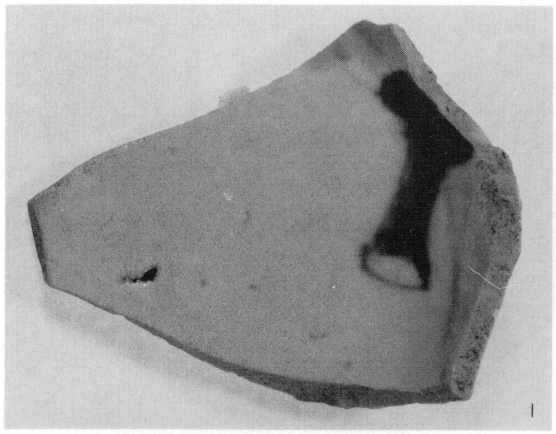
(1) 井戸出土遺物②

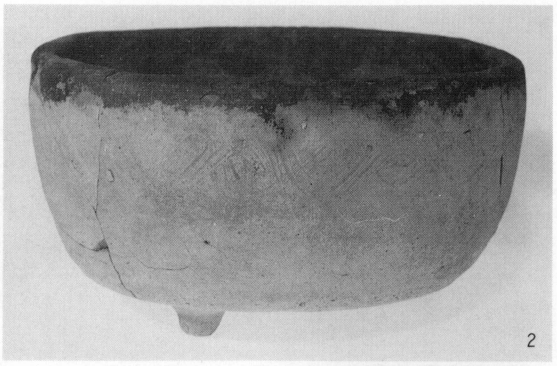


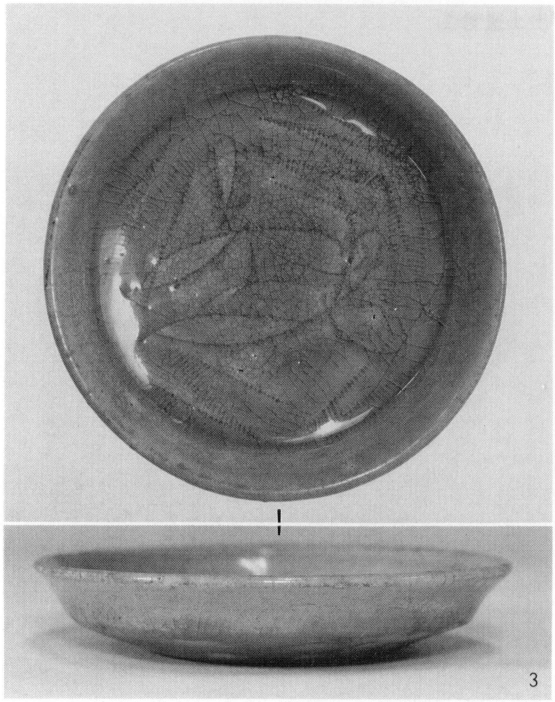


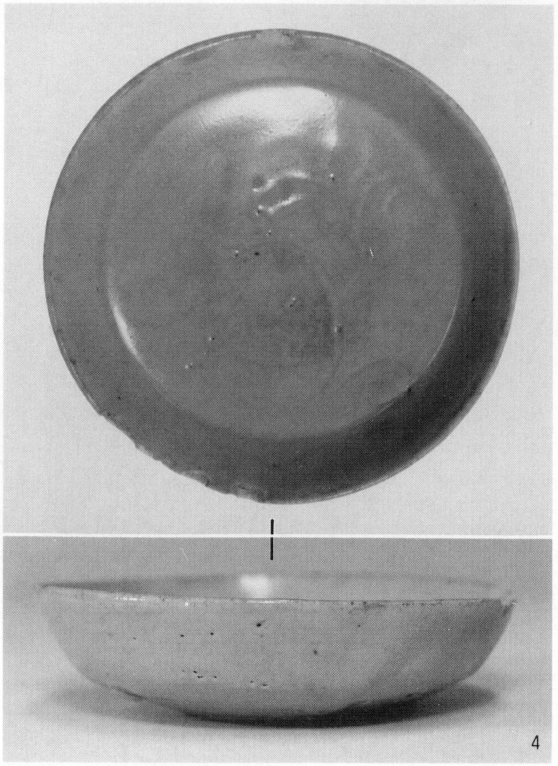
(2) SX 60出土遺物

(3) ST 50出土湖州鏡

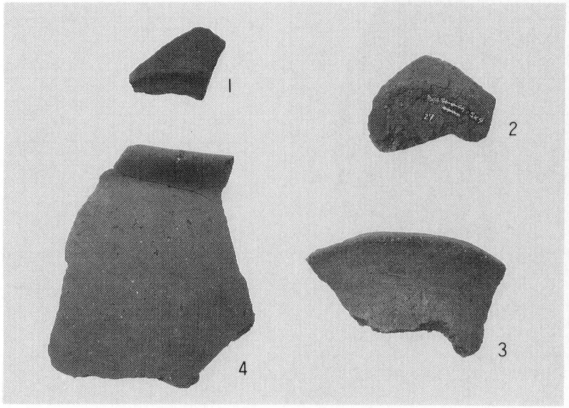


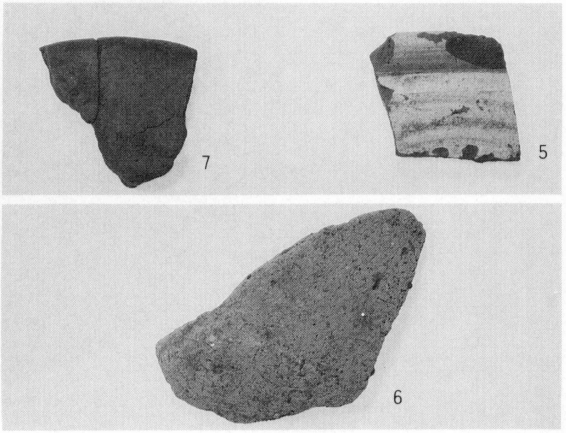






（1）　墓壙出土遺物





（2）　ピット・土壙出土遺物

高　江　遺　跡

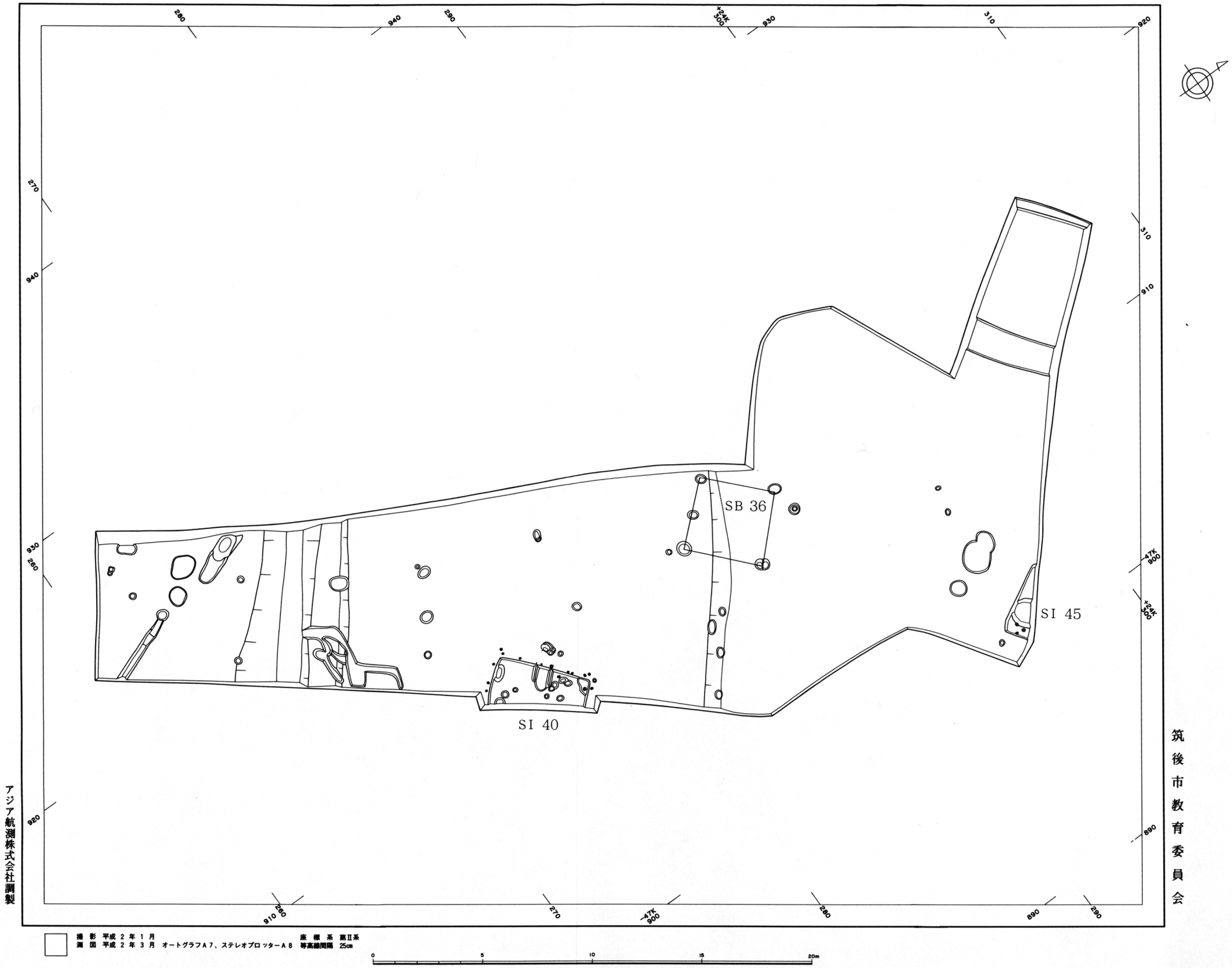
筑後市文化財調査報告書
第　7　集

平成 3 年 3 月20日

発　行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井 898

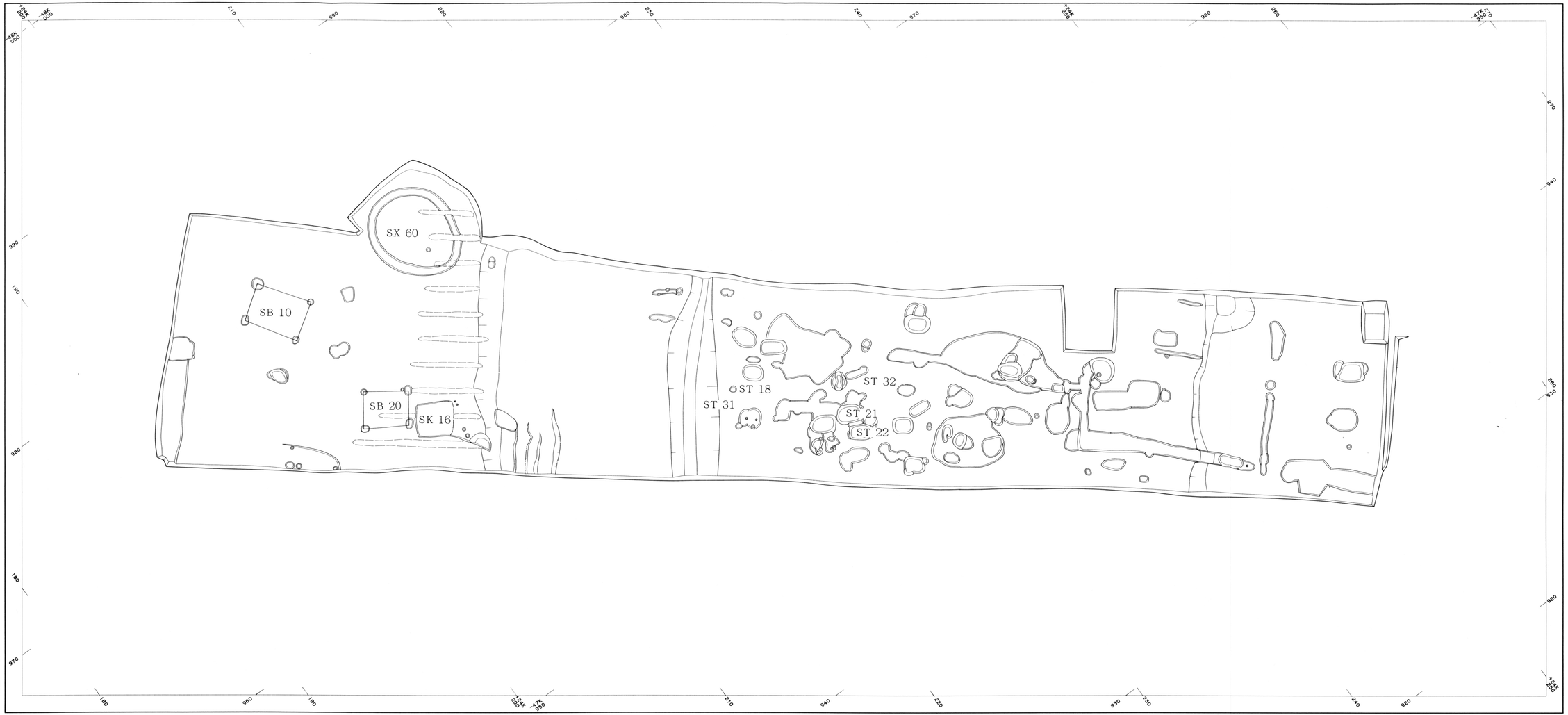
印　刷　アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通二丁目9－31

高 江 遺 跡



付図Ⅰ　高江遺跡A区遺構配置図（1/200）

高　江　遺　跡



撮影　平成２年１月　　座標系　第Ⅱ系
測図　平成２年３月　オートグラフＡ７、ステレオプロッターＡ８　等高線間隔　25cm

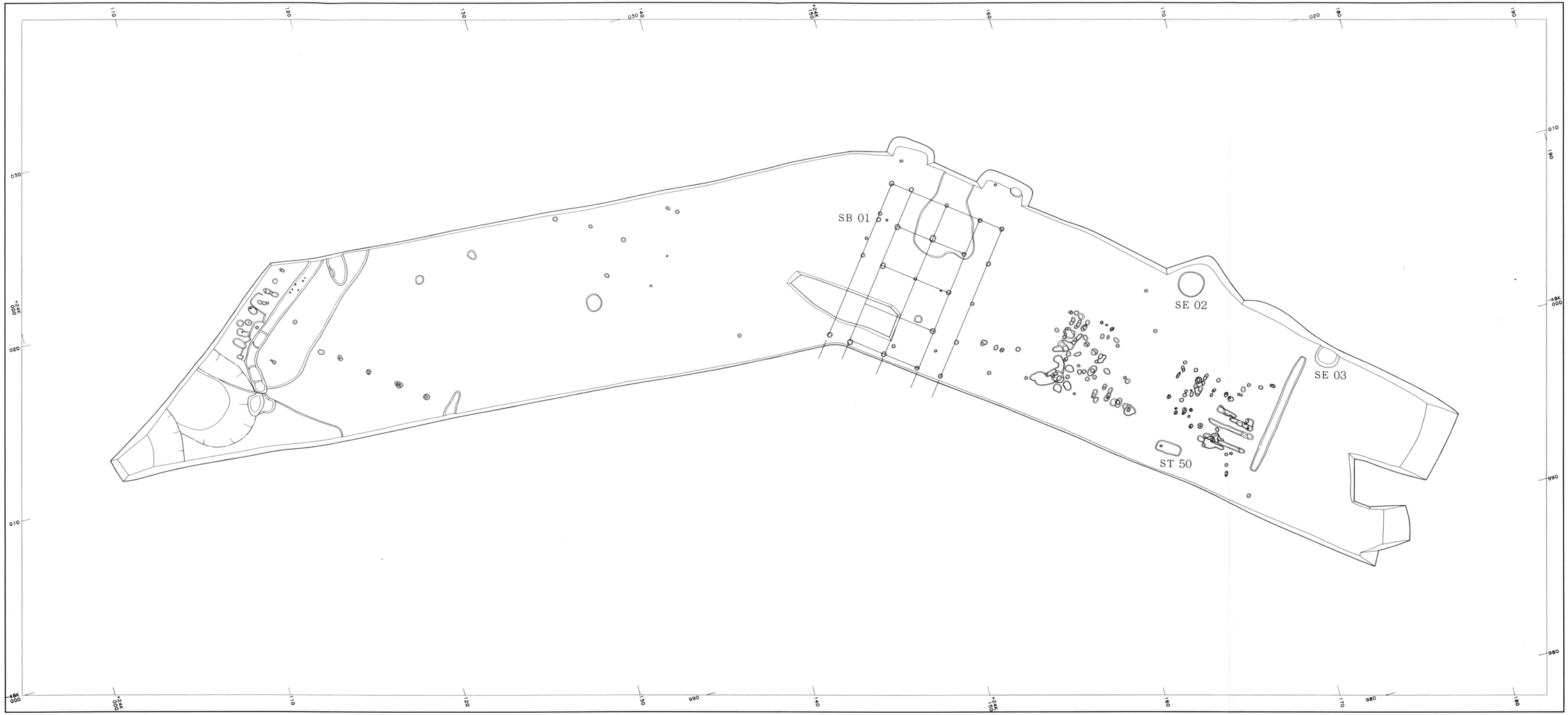
0　5　10　15　20m

アジア航測株式会社調製

筑後市教育委員会

付図２　高江遺跡Ｂ区遺構配置図（1/200）

高　江　遺　跡



撮影　平成２年１月　　座標系　第Ⅱ系
測図　平成２年３月　オートグラフＡ７、ステレオプロッターＡ８　等高線間隔　25cm

0　5　10　15　20m

付図３　高江遺跡Ｃ区遺構配置図（1/200）

アジア航測株式会社調製

筑後市教育委員会